

## 京都大学人文科学研究所所蔵『天地瑞祥志』第十七翻刻・校注（上）

山 崎 藍  
佐 野 誠 子  
佐 々 木 聡

### はしがき

『天地瑞祥志』は、唐代、薩守真による天文を中心とした専門類書であり、日本にのみ残された佚存書である。2011年秋より、数名の有志により天地瑞祥志研究会（代表・水口幹記）を立ち上げ、輪讀會を行ってきた。これまで、水口幹記、田中良明による第一の翻刻・校注を『藤女子大学國文學雑誌』93号、94号（2015年11月、2016年3月）に、佐野誠子、佐々木聡による第十四の翻刻・校注を『名古屋大学中国語学文学論集』第29輯（2015年12月）に掲載した。ここに第十七前半（甕まで）についての翻刻・校注を掲載する。『天地瑞祥志』についての詳細な解説は、『藤女子大学國文學雑誌』93号掲載の水口幹記による序を参照されたい。

この第十七前半の翻刻・校注は山崎藍（宅舎）、佐野誠子（光、血、肉、衣服、床、刀劍、鏡）、佐々木聡（鼎、釜、甑、甕）の三名が擔當したが、この成果は決して三名だけの手になるものではなく、研究会の参加者による意見の集約であることを附言しておく。

最後に、本書呪符畫像の掲載を許可して下さった京都大学人文科学研究所に記して謝意を示したい。

凡例は第29輯に掲載の第十四翻刻・校注を参照されたい。本稿では、わかりやすさのため、各項目の通し番号の前に項目名をつけた。また、前田尊經閣文庫本による校注もそれぞれの執筆者が行った。

### 翻刻・校注

#### 小篇目

#### 小篇目 01 ①

天地瑞祥志第十七

宅舎 光 血 害 毛 衣服 床 刀劍 鏡 鼎 釜 甑 甕 印璽 金縢 環 玉 貝  
蘇胡 山 石 船 金車 根車 象車 山車 烏車 威香

### 小篇目 01 ②

宅舎 光 血 肉 毛 衣服 床 刀劍 鏡 鼎 釜 甑 甕 印璽 金勝 環 玉 貝  
珊胡 山 石 舩 金車 根車 象車 山車 烏車 威香

### 小篇目 01 ③

宅舎 光 血 肉 毛 衣服 床 刀劍 鏡 鼎 釜 甑 甕 印璽 金勝 環 玉 貝  
珊胡 山 石 舩 金車 根車 象車 山車 烏車 威香

## 一、 宅舎

### 【概要】

本項目では家屋や宮殿などの建物に関する文献を引用する。『漢書』『晋書』などの史書（特に五行志）の他、『金海』や『孔子百廿占』といった佚文もみられる。

### 宅舎 01 ①

宅舎〈除格反入舒夜反去〉

### 宅舎 01 ②

宅舎〈除格反。入。舒夜反。去。〉

### 宅舎 01 ③

宅舎<sup>(一)</sup>〈除格の反。入。舒夜の反。去。〉

### 宅舎 01 ④

(一)『玉篇』卷一一ㄆ部「宅」に「除格切」、卷一五ㄥ部「舎」に「舒夜切」とある。(『廣韻』卷五「宅」に「場伯切」、卷四「舎」に「始夜切」。)

### 宅舎 02 ①

易曰上古穴居而野處後世聖人易之以宮室蓋取諸大壯其來尚矣

### 宅舎 02 ②

『易』曰、「上古穴居而野處。後世聖人易之以宮室。蓋取諸大壯<sup>□</sup>。」其來尚矣。

### 宅舎 02 ③

『易』に曰<sup>(一)</sup>く、「上古は穴居して野處す。後世の聖人 之を易ふるに宮室を以てす。蓋し諸を大壯に取る。」と。其の來たること尚し。

### 宅舎 02 ④

(一)『周易』繫辭下に記載有り。

### 宅舎 03 ①

宣公六年鄭公子豳滿与王子伯嚭語欲為卿〈曼滿伯嚭皆鄭大夫也〉伯嚭告人曰無德而貪其□□易豐之離也〈張宴曰離下震上豐上姤變□□□曰豐其屋部其家也守謂之豐大之也無德而貪

覆藏甚亦妖恠之甚之也〉弗過之矣〈師古言無德而大其屋不過三年必滅亡之也〉間一年鄭人殺之

#### 宅舎 03 ②

宣公六年、鄭公子曼滿與王子伯廖語、欲爲卿。〈曼滿・伯廖、皆鄭大夫也。〉伯廖告人曰、「無德而貪、其在『周易』豐之離也。」〈張晏曰、「離下震上、豐。上六變而之離、曰『豐其屋、蔀其家』也。」守謂之、豐大、之也。無德而貪、覆藏甚、亦妖恠之甚。之也。〉、弗過之矣。〈師古、「言無德而大其屋、不過三年、必滅亡。」之也。〉間一年、鄭人殺之。

#### 宅舎 03 ③

宣公六年、鄭の公子曼滿 王子伯廖と語り、卿爲らんと欲す。〈曼滿・伯廖、皆鄭の大夫なり。〉伯廖 人に告げて曰く、「徳無くして貪る、其れ『周易』の豊の離に在るなり。〈張晏曰く、「離下震上、豊なり。上六變じて離に之き、『其の屋を豊いにし、其の家に蔀す。』と曰ふなり。」と。守 之を謂へらく、豊は大なり、之なり。徳無くして貪り、覆藏すること甚しければ、亦た妖恠あること甚し。之なり。〉 之を過ぐるなし。」と。〈師古いふ、「言ふところは徳無くして其の屋を大いにするは、三年を過ぎずして、必ず滅亡す。」と。之なり。〉 一年を間てて、鄭人 之を殺す。

#### 宅舎 03 ④

(一)『漢書』卷二七中之上、五行志にみえる。言羞 咎僭に相當する。また、『春秋左氏傳』宣公六年に記載有り。引用する注などから、『漢書』を利用していたことがうかがえる。

#### 宅舎 04 ①

文公十三年火室屋懷近金你木 動也 〈守曰你病也多拂戾反前堂□□魯廟堂丈廟中央曰大室屋其□□尊高之也〉先是冬僖公薨十六月迺作主□□ 〈僖公卅三年十月薨至父二年二月乃作主間有一閭故十六月之也〉後六月又吉禘□大廟而致僖公 〈師古曰禘諦祭也父二年八月而禘也致謂升其主於廟也〉春秋譏之經曰大事干太廟躋僖公 〈躋登之也〉左氏說曰太廟周公之廟饗有禮義者也祀國之大事也惡其乱國之大事於大廟故言太事也登僖公於閔公上逆祀也 〈僖公閔之□兄堂為□臣 子一例不傳在閔上之也〉内為貌不恭而狂 〈狂謂易其常性也事在人貌篇之也〉外為言不從而僭故是歲自十二月不雨至千秋七月 〈言之不從其罰恒陽也事在人言篇也〉

景帝三年十二月吳二城門自傾大船自覆劉向以為金汴木 動也光是吳王濞 太子死於漢稱疾不朝陰与楚王伐謀為逆乱城猶國也其一門名曰楚門一門曰莫門吳地以船為家以魚為食天戒為曰与楚所謀傾國覆家吳王不寤正月与楚俱舉兵身死國亡京房易傳曰上下滅諄厥妖城門壞 〈師古曰諄戒也音布内反〉

宣帝時大司馬霍禹所居第門自壞時内不順外不敬見戒不改卒受滅亡之謀也

哀帝時大司馬董賢第門自壞時賢以私愛居大位賞賜無度驕慢不敬大失臣道見戒不改後賢夫妻自殺家徒令浦

#### 宅舎 04 ②

文公十三年、大室屋壞。近金沴木、木動也。〈守曰、「沴病也。（多）拂戾反。」「前堂□□魯、廟堂太廟、中央曰太室。屋、其上重屋尊高。」之也。〉先是、冬、僖公薨、十六月迺作主□□〈僖公卅三年十二月薨、至文二年二月、乃作主。間有一閏、故十六月。之也。〉、後六月、又吉禘於大廟而致僖公、〈師古曰、「禘祭也、文二年八月而禘也、致謂升其主於廟也。」〉、春秋譏之。『經』曰、「大事于太廟、躋僖公。」〈躋登。之也。〉左氏說曰、「太廟、周公之廟、饗有禮義者也、祀、國之大事也。惡其亂國之大事於大廟、故言大事也。登僖公於閔公上、逆祀也。〈僖雖閔之庶兄、嘗爲閔臣、臣子一例、不得在閔上。之也。〉内爲貌不恭而狂、〈狂謂易其常性也、事在人貌篇。之也。〉、外爲言不從而僭。故是歲自十二月不雨、至于秋七月。」〈言之不從其罰恒陽也、事在人言篇也〉

景帝三年十二月、吳二城門自傾、大船自覆。劉向以爲金沴木、木動也。先是、吳王濞以太子死於漢、稱疾不朝、陰與楚王戊謀爲逆亂。城猶國也、其一門名曰楚門、一門曰魚門。吳地以船爲家、以魚爲食。天戒若曰與楚所謀、傾國覆家。吳王不寤、正月與楚俱舉兵、身死國亡。京房『易傳』曰、「上下咸諄、厥妖城門壞。」〈師古曰、「諄惑也、音布内反。」〉

宣帝時、大司馬霍禹所居第門自壞。時内不順、外不敬。見戒不改、卒受滅亡之謀也。

哀帝時、大司馬董賢第門自壞。時賢以私愛居大位、賞賜無度、驕嫚不敬、大失臣道。見戒不改。後賢夫妻自殺、家徙合浦。

#### 宅舎 04 ③

文公十三年、大室の屋壞る。金は木を沴るに近し、木動くなり。〈守曰く、「沴は病なり。払戾の反。」と。「前堂を□□魯、廟堂を太廟といひ、中央を太室と曰ふ。屋は、其の上に屋を重ね尊高なるものなり。」之なり。〉是れより先、冬、僖公薨ず、十六月にして迺ち主を作る。□□。〈僖公は卅三年十二月に薨ず、文二年二月に至り、乃ち主を作る。間つに一閏有り、故に十六月なり。之なり。〉、後六月、又大廟に吉禘して僖公を致し、〈師古曰く、「禘は祭なり、文二年八月にして禘するなり、致は其の主を廟に升らすを謂ふなり。」と。〉春秋之を譏る。『經』に曰く、「太廟に大事あり、僖公を躋らす。」と。〈躋は登。之なり〉。左氏の説に曰く、「太廟は、周公の廟にして、禮義有る者に饗するなり、祀は、國の大事なり。其の國の大事を大廟に亂すを惡む、故に大事と言ふなり。僖公を閔公より上に登らすは、逆祀なり。〈僖は閔の庶兄と雖も、嘗て閔の臣爲り、臣子一例にして、閔の上に在るを得ず。之なり。〉、内は貌恭しからずして狂と爲し、〈狂は其の常性を易ふるを謂ふなり、事是人貌篇に在り。之なり。〉、外は言從はずして僭と爲す。故に是歲十二月自り雨ふらず、秋七月に至る。」と。〈言の從はざるは其の罰恒陽なり、事是人言篇に在るなり。〉

景帝三年十二月、吳の二城の門自ら傾き、大船自ら覆る。劉向以爲らく金は木を沴り、木動くなり。是れより先に、吳王濞太子の漢に死するを以て、疾を稱して朝せず、陰かに楚王戊と謀りて逆亂を爲す。城猶ほ國のごときなり、其の一門を名づけて楚門と曰ひ、一門を魚門と曰ふ。吳地船を以て家と爲し、魚を以て食と爲す。天戒めて楚と謀る所は、國を傾

け家を覆すと曰ふが若し。呉王は寤らず、正月に楚と俱に擧兵し、身死し國亡ぶ。京房『易傳』に曰く、「上下咸諄へば、厥の妖城門壞る。」と。〈師古曰く、「諄は惑なり、音布内の反。」と。〉

宣帝の時、大司馬霍禹の居る所の弟門自ら壞る。時に内に順はず、外に敬はず。戒められるれども改めず、卒に滅亡の謀を受くるなり。

哀帝の時、大司馬董賢の弟門自ら壞る。時に賢 私愛を以て大位に居り、賞賜に度無く、驕嫚にして敬はず、大いに臣道を失ふ。戒められるれども改めず。後に賢夫妻自殺し、家 合浦に徙さる。

#### 宅舎 04 ④

(一)『漢書』卷二七中之上、五行志にみえる。貌羞 金沴木に相當する。

(二)(一)の『漢書』該當箇所「至□于秋七月」に續き、「後年、若是者三、而太室屋壞矣。前堂曰太廟。」とあり同文がみえる。誤って紛れたか。

(三)『漢書』卷二七中之上、五行志、言羞に相當する箇所に、「傳曰「言之不從、是謂不艾、厥咎僭、厥罰恆陽、厥極憂。」とある。

(四)以下三條、全て、『漢書』卷二七中之上、五行志にみえる。貌羞 金沴木に相當する。また『開元占經』卷一一四「門崩壞」にも『漢書』五行志を出典として記載がある。

#### 宅舎 05 ①

成帝元延元年正月長安章城門怪〈晉灼曰出南頭第一門也牝是出籥者師古北所下以閉者也亦以鐵為之非出籥者也字曰案說文出閉牝也猶如牝往音祖高反也〉函谷關決門牡亦自亡〈韋昭曰函谷關邊小門小也師古曰非行人出人所由蓋關司曹府所在之門〉京房易傳曰飢而不損茲謂泰厥災水厥各牡亡妖辭曰關動牡飛辟為亡道臣為非厥谷亂臣謀篡〈李奇曰易妖變傳辭也〉故谷永對曰章城門通路函谷關距山東之險城門關守國之固 將去焉故牡飛也君門戶自亡其君且誠

#### 宅舎 05 ②

「成帝元延元年正月、長安章城門怪。〈晉灼曰、「出南頭第一門也。牡是出籥者。」師古、「牡所以下閉者也、亦以鐵爲之。非出籥者也。」守曰、「案『說文』、出閉、牡也、猶如牡往。音祖高反也。」〉函谷關次門牡亦自亡。〈韋昭曰、「函谷關邊小門、小也。」師古曰、「非行人出入所由、蓋關司曹府所在之門。」〉京房『易傳』曰、「飢而不損、茲謂泰。厥災水、厥咎牡亡。」『妖辭』曰、「關動牡飛。辟爲亡道、臣爲非。厥咎亂臣謀篡。〈李奇曰、「『易』妖變傳辭也。」〉故谷永對曰、「章城門通路、函谷關距山東之險、城門・關守國之固、固將去焉。故牡飛也。」「君門戶自亡、其君且誠。」

#### 宅舎 05 ③

「成帝元延元年<sup>(一)</sup>正月、長安の章城門に怪あり。〈晉灼曰く、「出づること南頭第一の門なり。牡 是れ出でて籥する者なり。」と。師古いはく、「牡は下閉する所以の者なり、亦た鐵を以て之を爲る。出でて籥する者に非ざるなり。」と。守曰<sup>(二)</sup>く、「案ずるに『說文』にいふ、出でて

閉づるは牡なり、猶ほ牡の往くが如し。音は祖高の反なり。」と。〉函谷關の次門の牡も亦た自ら亡す。〈韋昭曰く、「函谷關邊の小門にして、小なり。」と。師古曰く、「行人出入の由る所に非ず、蓋し關の司曹府の在る所の門なり。」と。〉京房『易傳』に曰く、「飢餓ども損せざるは、茲れを泰と謂ふ。厥の災ひ 水、厥の咎 牡亡す。」と。『妖辭』に曰く、「關動き牡飛ぶ。辟 亡道を爲し、臣 非を爲す。厥の咎 亂臣篡を謀る。」と。〈李奇曰く、「『易』妖變傳の辭なり。」と。〉故に谷永對へて曰く、「章城門は通路なり、函谷關は山東を距つの險なり。城門・關は國を守るの固めなれど、固め將に去らんとす。故に牡飛ぶなり。」と。」「君の門戸自ら亡せば、其の君且に誡められんとす。」と。

#### 宅舎 05 ④

- (一)『漢書』卷二七中之上、五行志にみえる。言羞 木沴金に相當し、「牝」を「牡」につくる。『禮記』月令孔穎達疏は「按漢書五行志每云牝飛及牝亡」とし、原文と同じく「牝」につくるが、阮元の校勘に「閩・監・毛本同。惠棟校宋本下『牝』作『牡』、盧文弨校云、上『牝』亦當作『牡』。」とある。
- (二)『字林』に記載がないことにより「守」に改めたが、他の箇所には「守曰案」とする按語は見あたらない。『説文』に該當資料無し。
- (三)『漢書』の韋昭注は「函谷關邊小門也。」とある。「小也」の「小」は、「之」(「小」＋「一」)の誤りか。
- (四)『開元占經』卷一一四、門閉折門 鑰自亡に、「京氏曰、君門戸自亡、其君且殺」とあり、続いて『漢書』五行志の一部を引く(「牡」につくる)。

#### 宅舎 06 ①

魏志曰黃初七年春正月幸許昌冒城南門無故自崩帝心惡之遂不入還洛陽五月崩

#### 宅舎 06 ②

『魏志』曰、「黃初七年春正月、幸許昌。許昌城南門無故自崩。帝心惡之、遂不入。還洛陽。五月崩。」

#### 宅舎 06 ③

『魏志』に曰く、「黃初七年春正月、許昌に幸す。許昌城の南門故無く自ら崩る。帝 心に之を惡み、遂に入らず。洛陽に還る。五月に崩ず。」と。

#### 宅舎 06 ④

- (一)『三國志』卷二、魏書・文帝紀に、より詳細な記載がみえる。『開元占經』卷一一四「門崩壞」(出典は『魏志』)の記載は本條とほぼ同じ。

#### 宅舎 07 ①

吳錄曰諸葛恪將誅所坐聽事屋棟析

#### 宅舎 07 ②

『呉録』曰、「諸葛恪將誅。所坐聽事屋棟折。」

宅舎 07 ③

『呉録』に曰く、「諸葛恪將に誅せられんとす。坐する所の聽事の屋棟折る。」と。

宅舎 07 ④

(一)『呉録』については、松本幸男「張勃呉録考」(『學林』14,15,1990年)、「續張勃呉録考 附 呉録紀傳」(『學林』16,1991年)に詳しい(本條の言及は無し)。『晉書』卷二七、五行志・木、『宋書』卷三〇、五行志に、『呉録』の引用ではないものの、類似の記載がある(『開元占經』には見あたらず)。『晉書』、『宋書』共に文字の異同はほとんどないが、『天地瑞祥志』と『晉書』は「聽」字、『宋書』は「廳」字につくることから、他の箇所同様『晉書』を参照したと思われる。『本邦殘存典籍による輯佚資料集成』(以下『本邦殘存』と省略)第一正史類『呉録』に記載有り。

宅舎 08 ①

鴻範五行傳曰燕王明光宮臥内戸閉不可王使廿餘人蹠戸終不開亦甚以鋸斷戸視内中無人

宅舎 08 ②

『鴻範五行傳』曰、「燕王明光宮臥内戸閉不可開。王使廿餘人蹠戸、終不開、亦甚。以鋸斷戸視、内中無人。」

宅舎 08 ③

『鴻範五行傳』に曰く、「燕王明光宮の臥内の戸閉まりて開くべからず。王は廿餘人をして戸を蹠ましむるも、終に開かず、亦た甚だし。鋸を以て戸を斷ちて視るも、内中に人無し。」と。

宅舎 08 ④

(一)『開元占經』卷一一四、門自開閉(出典は『洪範五行傳』)に、より詳細な記載がある。

宅舎 09 ①

京房易傳曰人君門戸無故不可開者君不可居大凶也〈小人家亦不可居有病城門有憂人事不通之也〉

宅舎 09 ②

京房『易傳』曰、「人君門戸無故不可關者、君不可居。大凶也。」〈小人家亦不可居。有病。城門有憂。人事不通。之也。〉

宅舎 09 ③

京房『易傳』に曰く、「人君の門戸故無く關づべからざる者は、君居るべからず。大凶なり。」と。〈小人の家も亦た居るべからず。病有り。城門は憂ひ有り、人事通ぜず。之なり。〉

宅舎 09 ④

(一)該當資料無し。『開元占經』卷一一四、門自開閉に、「京房『傳』曰、君門戸無故自闔、臣殺其君。」とある。

宅舎 10 ①

子寶晉紀曰熙元年太廟梁折四月太祖崩

宅舎 10 ②

干寶『晉紀』曰、「太熙元年、太廟梁折。四月太祖崩。」

宅舎 10 ③

干寶『晉紀』に曰く、「太熙元年、太廟の梁折る。四月太祖崩ず。」と。

宅舎 10 ④

(一)『開元占經』卷一一四、屋室自壞（出典は干寶『晉紀』）に同様の記載がみえる（「太祖」を「世祖」につくる）。

宅舎 11 ①

沈約宋書曰元嘉十七年劉武為吳郡、堂屋西頭鴟尾元故落治之未畢東鴟尾復落是誅斌之應也

宅舎 11 ②

沈約『宋書』曰、「元嘉十七年、劉斌爲吳郡、郡堂屋西頭鴟尾无故落。治之未畢、東鴟尾復落。是誅斌之應也。」

宅舎 11 ③

沈約『宋書』に曰く、「元嘉十七年、劉斌吳郡たりしとき、郡の堂屋の西頭の鴟尾 故無く落つ。之を治むること未だ畢はらざるに、東の鴟尾復た落つ。是れ斌を誅せんとするの應なり。」と。

宅舎 11 ④

(一)『宋書』卷三〇、五行志・木・金沴木」に、より詳細な記載がみえる。

宅舎 12 ①

金海曰舎柱標上黃花生外賊來也屋柱無故自出夏口舌亡財物及家長死

宅舎 12 ②

『金海』曰、「舎柱標上黃花生、外賊來也。屋柱無故自出、夏口舌、亡財物、及家長死。」

宅舎 12 ③

『金海』に曰く、「舎柱の標上に黃花生ずれば、外賊來たるなり。屋柱に故無く自ら出だせば、夏は口舌あり、財物を亡ひ、及び家長死す。」と。

宅舎 12 ④

(一)『金海』は、『隋書』經籍志の子部兵家類に著録あり（蕭吉撰。三十卷）。本條は『本邦殘存』子部第十兵家類に引用がある。



#### 宅舎 13 ①

百廿占曰人君宮闕庭門戸無故自動君且移自動搖有音聲是謂壞守不出三年交兵若近臣若親屬也君室一夜易面北西東為政令

#### 宅舎 13 ②

『百廿占』曰、「人君宮闕庭門戸無故自動、君且移。自動搖有音聲、是謂壞守。不出三年、交兵若近臣若親屬也。君室一夜易面北西東、為政令。」

#### 宅舎 13 ③

『百廿占』に曰く、「人君の宮闕庭の門戸故無く自ら動けば、君且に移らんとす。自ら動搖し音聲有り、是れを壞守と謂ふ。三年を出でず、兵と交はること近臣の若くし親屬の若くするなり。君室一夜に面を北西東に易ふれば、政令を爲す。」と。

#### 宅舎 13 ④

(一)『百廿占』は不詳。『隋書』經籍志に著録無し。『本邦殘存』子部第十三 五行類「孔子百廿占」に本條の引用がある。

#### 宅舎 14 ①

大兵書曰軍門戸自動敵人散走各歸其家也城自高長有兵不出二年人君門戸自開臣且戒其君其邑虛〈子日門開有小女牢獄事丑日門開有喪易鄉寅日為争訟卯日飛災至辰日大病禍至巳日獄死午日虎所逮死未日橫病至申日有水厄也酉日有殘死戌日口舌病亥日口舌飛災之也〉屋上氣自倚若廻反憂兵有大災確無故自舂憂暴死長婦口舌

#### 宅舎 14 ②

『大兵書』曰、「軍門戸自動、敵人散走、各歸其家也。城自高長、有兵、不出二年。人君門戸自開、臣且戒其君、其邑虛。〈子日門開、有小女牢獄事、丑日門開、有喪易鄉、寅日為争訟、卯日飛災至、辰日大病禍至、巳日獄死、午日虎所逮死、未日橫病至、申日有水厄也、酉日有殘死、戌日口舌病、亥日口舌飛災。之也。〉屋上氣自倚若廻反、憂兵、有大災。確無故自舂、憂暴死長婦口舌。」





#### 宅舎 14 ③

『大兵書』に曰く、「軍の門戸自ら動けば、敵人散走し、各おの其の家に歸るなり。城自ら高長すれば、兵有り、二年を出でず。人君の門戸自ら開けば、臣且に其の君を戒めんとし、其の邑虚し。〈子日に門開けば、小女の牢獄の事有り、丑日に門開けば、喪有りて郷を易へ、寅日 争訟を爲し、卯日 飛災至り、辰日 大病して禍至り、巳日 獄死し、午日 虎の逮死する所となり、未日 横病至り、申日 水厄有るなり、酉日 殘死有り、戌日 口舌・病あり、亥日 口舌ありて飛災す。之なり。〉屋上に氣自ら倚る若しくは廻反すれば、兵を憂ひ、大災有り。確 故無く自ら舂けば、暴死長婦口舌を憂ふ。」と。

#### 宅舎 14 ④

(一)『本邦殘存』子部第十兵家類「太公兵法」に引用あり。「太公兵法」は『隋書』經籍志子部兵家類に著録あり(太公兵法二卷(注釈に「梁三卷」)、太公兵法六卷(注釈に「梁有太公雜兵書六卷」))。





#### 宅舎 15 ①

〈巳槐  日日日日〉  〈開戸自開也〉  〈門戸自閉也〉  〈屋无奇反〉

#### 宅舎 15 ②

  〈開、戸自開也。〉  〈門戸自閉也。〉  〈屋、無奇反。〉

#### 宅舎 15 ③

 <sup>(一)</sup>  〈開、戸自ら開くなり。〉  〈門戸自ら閉づるなり。〉  〈屋、無奇の反。〉

#### 宅舎 15 ④

(一)呪符が本文に紛れたと思われる。本條を含む『天地瑞祥志』の呪符については、水口幹記「『天地瑞祥志』に載る呪符」(『遣隋使・遣唐使と住吉津』東方出版、2008年)に詳しい。

(山崎藍)

## 二、 光

### 【概要】

光の出現による凶兆を緯書や志怪などの引用により記述する。

#### 光 01 ①

光 〈古黄反平〉

#### 光 01 ②

光 〈古黄反。平〉

#### 光 01 ③

光 <sup>(一)</sup> 〈古黄の反。平〉

#### 光 01 ④

(一)『玉篇』卷二一火部「𠄎」(「光」の異体字)、『廣韻』卷二「光」字「古黄切」。

光 02 ①

春秋潛潭ひそかに巴は曰山有長光臣不良地出光如火照國亡又云五色照于宮天子无道兵革俱會〈宋均曰天子无道天下各以其色照似飛兵並集也〉

光 02 ②

『春秋潛潭巴』曰、「山有長光、臣不良。地出光、如火照、國亡。」又云、「五色照于宮、天子無道、兵革俱會。」〈宋均曰、「天子無道、天下各以其色照。似飛兵並集也。」〉

光 02 ③

『春秋潛潭巴』に曰く、<sup>(一)</sup>「山に長光有れば、臣良からず。地光を出だし、火の如く照らせば、國亡ぶ。」と。又た云ふ、<sup>(二)</sup>「五色宮を照らせば、天子道無く、兵革俱に會す。」と。<sup>(三)</sup>〈宋均曰く、「天子に道無ければ、天下各の其の色を以て照らす。飛兵並び集まるが似きなり。」と。〉

光 02 ④

(一)『唐開元占經』卷九九、山出光に「『春秋潛潭巴』曰、山有長光、臣下不良。」とある。

他『五行類事占』卷四にみえる。

(二)『續漢書』志第一七、五行志五・投蜺、『唐開元占經』卷九八、虹蜺占、『太平御覽』卷八七八、咎徵部五・虹蜺、『蔡中郎集』卷二「答詔問災異八事」にみえる。その他、『開元占經』卷四、地出光には『地鏡』からとして、『古微書』卷一一には、出處を示さず類似の文がみえる。

(三)宋均注は出典未詳。『隋志』經部・讖緯類に『春秋災異』十五卷郝萌撰。梁有『春秋緯』三十卷、宋均注とある。

光 03 ①

抱朴子曰有赤如火從天來下入軍 乱將死。

光 03 ②

『抱朴子』曰、「有赤如火、從天來下入軍、軍亂將死。」

光 03 ③

『抱朴子』に曰く、<sup>(一)</sup>「赤きもの火の如き有り、天從り來たりて下りて軍に入れば、軍亂れて將死す。」と。

光 03 ④

(一)『唐開元占經』卷九九、光に『抱朴子』からとして引用がある。『唐開元占經』卷九四、兵氣にも出處を示さないほぼ同文あり。類似した文が『通典』卷一六二、兵一五・風雲氣候雜占、『隋志』卷二〇、天文志中・雜妖、『乙巳占』卷一、『靈臺秘苑』、『武經總要』に出處を示さずにみえる。現行の『抱朴子』にはみえず。

光 04 ①

晋中興書曰張祚稱涼王日夜天上有光如蓋聲若雷震動郭邑十日大風折木

光 04 ②

『晉中興書』曰、「張祚稱涼王。其夜天上<sup>□</sup>有光如蓋。聲若雷。震動郭邑。十日、大風折木。」

光 04 ③

『晉中興書』に曰く、「張祚<sup>(一)</sup>涼王を稱す。其の夜天上に光有り蓋の如し。聲雷の若し。郭邑を震動す。十日、大風木を折る。」と。

光 04 ④

(一)『晉中興書』の佚文に該當資料なし。『晉書』卷八六張祚傳にみえる。また、『太平御覽』卷八七四、咎徵部一・天光にも『晉書』からとした引用がある。この他、『魏書』卷九九張祚傳にも類似した記述あり。

光 05 ①

異苑曰惠帝羊皇后將入宮衣中忽有火光自後蕃王遭兵四癘四立及洛陽失御復為劉曜所嬪

光 05 ②

『異苑』曰、「惠帝羊皇后、將入宮<sup>□</sup>。衣中忽有火光。自後蕃王遭兵、四癘四立。及洛陽失御、復為劉曜所嬪。」

光 05 ③

『異苑』に曰く、「惠帝羊皇后、將に宮に入らんとす。衣中忽ち火光有り。後自り蕃王兵を遭へ、四たび癘し四たび立つ。洛陽御を失ふに及び、復た劉曜の嬪する所と爲る。」と。

光 05 ④

(一)『異苑』卷四にみえる。『太平御覽』卷八八五、妖異部一・恠に『異苑』からとして引用がある。

光 06 ①

白澤圖曰夜行見火光下有數十小兒戴之一物二名上為游光下為野僮此二物見者天下多疾死之民一曰僮兄弟八人也

光 06 ②

『白澤圖』曰、「夜行見火光。下有數十小兒、戴之一物。二名上為游光、下為野僮。此二物、見者天下多疾死之民。一曰、僮兄弟八人也。」

光 06 ③

『白澤圖』に曰く、「夜行して火光を見る。下に數十の小兒有り、之の一物を戴す。二名上りて游光と爲り、下りて野僮と爲る。此の二物、見る者天下疾みて死するの民多し。一に曰く、僮の兄弟八人なり。」と。

光 06 ④

(一)この『天地瑞祥志』にのみみられる文。佐々木聡『復元白澤圖—古代中國の妖怪と辟邪文化』(白澤社、2017年)輯校 66 (p.94) 参照。

光 07 ①

京房易曰人帶有光進之人印有光怨免官以酒脯祀有賀也人家垣見火光近之不動此是兵死大憂有者及兵

光 07 ②

『京房易』曰、「人帶有光、進之。人印有光、怨免官。以酒脯祀、有賀也。人家垣、見火光近之不動、此是兵死大憂、有者及兵。」

光 07 ③

『京房易』に曰く、<sup>(一)</sup>「人帶に光有れば、之を進む。人印に光有れば、怨にして官を免ぜらる。酒脯を以て祀れば、賀有るなり。人家の垣ありて、火光の之に近づきて動かざるを見れば、此れは是れ兵死し大いに憂ひ、有<sup>たも</sup>つ者兵に及ぶ。」と。

光 07 ④

(一)該當資料なし。

光 08 ①

異苑曰下伯王母江氏義熙中夜燈忽從空而行如此四數江少時亡也

光 08 ②

『異苑』曰、「<sup>●</sup>下伯玉母江氏、義熙中、夜燈忽從空而行。如此四數。江少時亡也。」

光 08 ③

『異苑』に曰く、<sup>(一)</sup>「下伯玉の母江氏、義熙中、夜燈忽ち空從り行く。此くの如きこと四數。江少時にして亡するなり。」と。

光 08 ④

(一)現行十卷本『異苑』にみえず。他書にも該當資料なし。『異苑』卷三には下伯玉本人の死の予兆の話がある。これに附記されたものだったか。

光 09 ①

子日地亟黒大憂小光急去一云憂六畜丑日見光病去宅下大吉一云憂家長□寅見光聚憂罪人一云憂煞小口□卯日見光大吉一日憂争田樹□辰日見光為懸官一云憂小婦子病□巳日見光為懸官夫女子病一云憂父母病□午日見光大吉宜牛馬一云憂長婦家長一云憂小口死□未日見光初祀鬼不吉殺母人□申日見光為口舌疫病一云憂母不還死池許□酉日見光大吉一云憂婦人斲訟相煞戌日見光家長衰急吉一云兵禍死故牢獄人相幸亥日見光為女子病

光 09 ②

子日地亟黒大憂。小光急去。一云、憂六畜。丑日見光、病去宅下、大吉。一云、憂家長。<sup>●</sup>□寅日見光聚、憂罪人。一云、憂殺小口。□卯日見光、大吉。一日、憂争田樹。□辰日見光、

爲懸官。一云、憂小婦子病。□巳日見光、爲懸官。夫女子病。一云、憂父母病。□午日見光、大吉。宜牛馬。一云、憂長婦家長。一云、憂小口死。□未日見光、初祀鬼、不吉。殺母人。□申日見光、爲口舌疫病。一云、憂母不還死池許。□酉日見光、大吉。一云、憂婦人所訟相殺。戌日見光、家長衰急。吉。一云、兵禍死。故牢獄人相幸。亥日見光、爲女子病。

光 09 ③

<sup>(三)</sup>子日光を見れば、病宅下に去り、大吉なり。一に云ふ、家長を憂ふ、と。  
丑日光を見れば、病宅下に去り、大吉なり。一に云ふ、家長を憂ふ、と。  
寅日光の聚まるを見れば、罪人を憂ふ。一に云ふ、小口を殺すを憂ふ、と。  
卯日光を見れば、大吉なり。一に曰く、田樹を争ふを憂ふ、と。  
辰日光を見れば、懸官と爲る。一に云ふ、小婦子の病を憂ふ、と。  
巳日光を見れば、懸官と爲る。夫れ女子病む。一に云ふ、父母の病を憂ふ、と。  
午日光を見れば、大吉なり。牛馬に<sup>よろ</sup>宜し。一に云ふ、長婦家長を憂ふ、と。一に云ふ、小口の死するを憂ふと。  
未日光を見れば、初めて鬼を祀るに、不吉なり。母人を殺す。  
申日光を見れば、口舌疫病と爲る。一に云ふ、母の還らざりて池の許に死するを憂ふ、と。  
酉日光を見れば大吉なり。一に云ふ、婦人の訟ふる所相殺すを憂ふ、と。  
戌日光を見れば、家長衰ふること急なり。吉なり。一に云ふ、兵禍に死す。故に牢獄 人相幸なり、と。  
亥日光を見れば、女子病と爲る。

光 09 ④

(一)出典未詳。

光 10 ①

光見人頭精神還無他光見床壁為疾病光見石中光見門致訟事光見飯貪懸官光見屋間死亡

光 10 ②

光見人頭、精神還無他。光見床壁、爲疾病。光見石中、光見門、致訟事。光見飯、貪懸官。光見屋間、死亡。

光 10 ③

<sup>(一)</sup>光人頭に見るれば、精神還りて他無し。光床壁に見るれば、疾病を爲す。光石中に見るれば、光門に見るれば、訟事を致す。光飯に見るれば、懸官を貪ぼる。光屋間に見るれば、死亡す。

光 10 ④

(一)出典未詳。

### 三、 血

#### 【概要】

血の出現による凶兆を緯書や志怪などの引用によってしるす。

#### 血 01 ①

血〈呼穴反入〉

#### 血 01 ②

血〈呼穴反。入〉

#### 血 01 ③

血<sup>(一)</sup>〈呼穴の反。入〉

#### 血 01 ④

(一)『玉篇』卷七血部「血」字「呼穴切」、『廣韻』卷五「血」字「呼決切」。

#### 血 02 ①

淮南子曰蚩散積血以類推也〈許慎注曰食血故散爲血无灾也〉

#### 血 02 ②

『淮南子』曰、「蚩散積血。以類推也。〈許慎注曰、「食血。故散爲血、無災也。」〉」

#### 血 02 ③

『淮南子』に曰く、「<sup>(一)</sup>蚩散じて血を積む。類を以て推すなり。〈許慎注に曰く、「血を食らふなり。故に散じて血と爲れば、災無きなり。」〉」と。

#### 血 02 ④

(一)『淮南子』説山訓にみえる。『太平御覽』卷九四五、虫豸部二・蚩に引用される『淮南子』に許慎の注(『淮南鴻烈問詁』佚文)が引用されている。

#### 血 03 ①

春秋潛潭巴曰衣有血身將僂其有赤毛不死必逝

#### 血 03 ②

『春秋<sup>●●</sup>潛潭巴』曰、「衣有血、身將僂。其有赤毛、不死必逝。」

#### 血 03 ③

『春秋潛潭巴』に曰く、「<sup>(一)</sup>衣に血有れば、身將に僂せられんとす。其れ赤毛有れば、死せずとも必ず逝く。」と。

#### 血 03 ④

(一)該當資料なし。類似の文が[毛 02]にも引用され、そちらには宋均の注もある。

[血 04 ①]

洞林曰永相父莫家血汙衣郭璞以為母人大衰也

[血 04 ②]

『洞林』曰、「永相父、莫家、血汚衣。郭璞以為、母人大衰也。」

[血 04 ③]

『洞林』に曰く、「<sup>(一)</sup>永く父を相すれば、家莫く、血衣を汚す。郭璞以為らく、母人大いに衰ふるなり。」と。

[血 04 ④]

(一)該當資料なし。『易洞林』は、『隋志』子部五行類三卷郭璞撰。

[血 05 ①]

京房曰血汙衣下人欲煞新曰昌邑王即位血汙坐席龔遂曰血者陰也陰者憂象也太王恐離大憂宜畏慎也

[血 05 ②]

京房曰、「血汚衣下、人欲殺新。」曰、「昌邑王即位、血汚坐席。龔遂<sup>□</sup>曰、『血者陰也。陰者憂象也。太王恐離大憂。宜畏慎也。』」

[血 05 ③]

京房曰く、「<sup>(一)</sup>血衣の下を汚がせば、人新たなるを<sup>きい</sup>殺せんと欲す。」と。曰く、「<sup>(二)</sup>昌邑王位に即き、血坐席を汚す。龔遂曰く、『血は陰なり。陰は憂の象なり。太王大憂に<sup>かか</sup>離るを恐る。宜しく畏れ慎しむべきなり。』」と。

[血 05 ④]

(一)出典未詳。

(二)『漢書』卷六三、武五子傳・昌邑王哀王髡傳にみえる。同内容は『太平御覽』卷八九、皇王部一四・廢帝海昏侯にも『漢書』からとして引用がある。ただし両者とも「太王恐離大憂」に該当する文言はみられない。

[血 06 ①]

尚書中候曰桀无道兩血

[血 06 ②]

『尚書中候』曰、「桀無道<sup>□</sup>雨血。」

[血 06 ③]



『尚書中候』に曰く、<sup>(一)</sup>「桀に道無ければ、血を雨<sup>ふ</sup>らす。」と。

血 06 ④

(一)『唐開元占經』卷三、天雨血に『尚書中候』からとして引用がある。

血 07 ①

春秋運升樞曰偏任不移兩血灑流廣三尺長五尺大如錢小如麻後二年王莽

血 07 ②

『春秋運斗樞』曰、「偏任不移。雨<sup>□</sup>血灑流、廣三尺、長五尺。大如錢、小如麻。後二年王莽。」

07 ③

『春秋運斗樞』に曰く、<sup>(一)</sup>「偏任移らず。血を雨<sup>ふ</sup>らせて灑流し、廣さ三尺、長さ五尺。大なるは錢の如く、小なるは麻の如し。後二年王莽あり。」と。

血 07 ④

(一)「灑流」まで、『唐開元占經』卷三、天雨血に『運斗樞』からとした引用がある。そのあとの内容は、『漢書』卷二七中之下、五行志に哀帝建平四年のこととしてみえ、『唐開元占經』の同箇所にも『漢書』からとして引用されている。『太平御覽』卷八七七、咎徵部四・雨血にも『漢書』からとして同内容あり。

血 08 ①

京房易妖占曰天雨血染朝衣居戮死血從地中出國虛天雨民曹無食行悲又云功臣戮厥妖地生血

血 08 ②

京房『易妖占』曰、「天雨血、染朝衣・居、戮死。血從地中出、國虛。天雨<sup>□</sup>血、民曹無食、行悲。」又云、「功臣戮、厥妖地生血。」

血 08 ③

京房『易妖占』に曰く、<sup>(一)</sup>「天血を雨<sup>ふ</sup>らし、朝衣・居を染むれば、戮死す。血地中從り出づれば、國虚し。天血を雨<sup>ふ</sup>らせば、民曹にして食無く、悲を行ふ。」と。又た云ふ、<sup>(二)</sup>「功臣戮すれば、厥の妖地血を生ず。」と。

血 08 ④

(一)該當資料なし。『唐開元占經』卷三、天雨血に『易飛候』からとする類似文あり。

(二)『唐開元占經』卷四、地嘔血に『易妖占』からとした引用がある。

血 09 ①

兵書曰地生血者將軍宜死一日賊且来凶將虚

血 09 ②

『兵書』曰、「地生血者、將軍宜死。一日、賊且來、國<sup>□</sup>將虚。」

血 09 ③

『兵書』に曰く、「<sup>(一)</sup>地血を生ずれば、將軍宜しく死すべし。一に曰く、賊且に來たらんとすれば、國將に虚しくならんとす。」と。

血 09 ④

(一)出典未詳。『唐開元占經』卷四、地嘔血に引用される『地鏡』に類似した内容がみえる。『兵書』という書名は『隋志』に多く著録される。

血 10 ①

抱朴子曰軍中地生血將軍且死若黃將軍得大利若赤大兵起

血 10 ②

『抱朴子』曰、「軍中地生血、將軍且死。若黃、將軍得大利。若赤、大兵起。」

血 10 ③

『抱朴子』に曰く、「<sup>(一)</sup>軍中地血を生ずれば、將軍且に死せんとす。若し黄なれば、將軍大利を得たり。若し赤なれば、大兵<sup>た</sup>起つ。」と。

血 10 ④

(一)類似の文が『唐開元占經』卷四、地動及び『太平御覽』卷八八〇、咎徴部七・地裂に『抱朴子』からとして引用がある。現行の『抱朴子』にはみえず。

血 11 ①

同林曰右將軍庫洪食林中有凝血如兩三指遂病亡血汙器物為兵勿用也

血 11 ②

『同林』曰、「右將軍庫洪、食林中。有凝血如兩三指。遂病亡。血汚器物、爲兵勿用也。」

血 11 ③

『同林』に曰く、「<sup>(一)</sup>右將軍庫洪、林中に食す。凝血の兩三指の如き有り。遂に病みて亡す。血器物を汚す、兵の爲に用ふる勿きなり。」と。

血 11 ④

(一)出典未詳。『同林』は『易洞林』か。『隋志』子部五行類に『易洞林』三卷 郭璞撰との著録あり。

血 12 ①

太公金匱曰堯克有苗 民時而血沾衣有此妖乎一臣曰非妖之大且有苗誅諫者尊无功退有能遇民如仇故亡耳

血 12 ②

『太公金匱』曰、「堯克有苗。苗民時<sup>□</sup>雨血、沾衣。有此妖乎。一臣曰、『非妖之大。且有苗誅諫者、尊無功、退有能。遇民如仇、故亡耳。』」

血 12 ③

『太公金匱』に曰く、<sup>(一)</sup>「堯有苗を克す。苗民時に血を雨らし、衣を沾す。此の妖有るか。一臣曰く、『妖の大なるに非ず。且つ有苗の誅諫する者、尊にして功無く、退きて能有り。民に遇ふこと仇の如くし、故に亡するのみ。』」と。

血 12 ④

(一)『唐開元占經』卷三、天雨血に『太公金匱』からとして引用がある。

血 13 ①

家見血鬼之精也著門戸有縣官事著井竈大人素食著車船行人有官事著衣冠君子免官小人憂官事著床席有病著廁則物亡著履為刑獄起著案馬兵傷著碓有喪著五檠丈人恨著扇有口舌著杖為不安

血 13 ②

家見血、鬼之精也。著門戸、有縣官事。著井竈、大人素食。著車船、行人有官事。著衣冠、君子免官、小人憂官事。著床席、有病。著廁、則物亡。著履、為刑獄起。著案馬、兵傷。著碓、有喪。著五檠、丈人恨。著扇、有口舌。著杖、為不安。

血 13 ③

<sup>(一)</sup>家血を見るは、鬼の精なり。門戸に著けば、縣官の事有り。井竈に著けば、大人素食す。車船に著けば、行人に官事有り。衣冠に著けば、君子官を免ぜられ、小人官事を憂ふ。床席に著けば、病有り。廁に著けば、則ち物亡<sup>うしな</sup>ふ。履に著けば、刑獄起つるを為す。案馬に著けば、兵傷る。碓に著けば、喪有り。五檠に著けば、丈人恨む。扇に著けば、口舌有り。杖に著けば、不安を為す。

血 13 ④

(一)出典未詳。

血 14 ①

幽明録曰元嘉九年南陽樂遐當在内忽空中有呼其夫婦名甚急半日半夜乃亡後數日夜衣服悉是血未一月日夫婦相繼病卒

血 14 ②

『幽明録』曰、「元嘉九年、南陽樂遐、當在内、忽空中有呼其夫婦名。甚急。半日半夜乃亡。後數日夜衣服悉是血。未一月日、夫婦相繼病卒。」

血 14 ③

『幽明録』に曰く、<sup>(一)</sup>「元嘉九年、南陽<sup>がく</sup>の樂遐、内に在るに當つて、忽ち空中に其の夫婦の名を呼ぶ有り。甚だ急なり。半日半夜にして乃ち亡す。後數日、夜衣服悉く是れ血なり。未だ一月日ならずして、夫婦相繼ぎて病みて卒す。」と。

血 14 ④

- (一)『古小説鉤沈』本第 243 条。『太平御覽』卷八八五、妖異部一・怪、『太平廣記』卷三六〇、妖怪二に『幽明錄』からとして引用がある。

血 15 ①

異苑曰栖振在淮南夜聞開戸求火看是大聚血俄為義師所屠

血 15 ②

『異苑』曰、「<sup>□</sup>桓振在淮南。夜聞開戸。求火看、是大聚血。俄為義師所屠。」

血 15 ③

『異苑』に曰く、「<sup>(一)</sup>桓振淮南に在り。夜戸を開くを聞く。火を求めて看れば、是れ大なる聚血なり。俄にして義師の屠る所と爲る。」と。

血 15 ④

- (一)『異苑』卷四にみえる。『太平廣記』卷三六〇、妖怪二に『異苑』からとして引用がある。

血 16 ①

述異記曰庾續家有物色赤形似牛心就視是凝血後洧變成赤斗流散丞相劉宣所誅

血 16 ②

『述異記』曰、「<sup>●</sup>庾續家有物。色赤形似牛心。就視是凝血。後有變成赤汁流散。丞相<sup>●</sup>劉宣所誅。」

血 16 ③

『述異記』に曰く、「<sup>(一)</sup>庾續の家に物有り。色赤にして形牛心の<sup>ごと</sup>似し。就きて視れば是れ凝血なり。後に變じて赤汁と成りて流散する有り。丞相劉宣の誅する所となる。」と。

血 16 ④

- (一)祖沖之、任昉『述異記』ともみえず。中島長文ら「魯迅『古小説鉤沈』校本」(京都大學文學研究科中國語學中國文學研究室、2017 年) p.310 は、この條を祖沖之『述異記』の佚文として採用し、劉宣を劉義宣であると直す。劉義宣は、南朝宋武帝劉裕の第六子であり、丞相の位についている。祖沖之『述異記』に劉義宣に關する話がもう一條ある(『藝文類聚』卷九五、『太平御覽』卷七二六、卷九一一所引)。劉宣のままの場合、十六國漢國の丞相に劉宣がいる。中島に従い「斗」字を「汁」に改めたが、「赤汁○斗」の文言から「汁○」が脱落した可能性もあるか。

血 17 ①

沈約宋書曰江湛家數見怪異未敗日少眠牀忽有數升血

血 17 ②

沈約『宋書』曰、「江湛家數見怪異。未<sup>□</sup>敗日、少眠牀<sup>□</sup>忽有數升血。」

血 17 ③

沈約『宋書』に曰く、<sup>(一)</sup>「江湛の家 數<sup>しばし</sup>ば怪異を見る。未だ敗れざるの日、少しく眠りて牀に忽ち數升の血有あり。」と。

血 17 ④

(一)『宋書』卷七一、江湛傳にみえる。

血 18 ①

續搜神曰新野庾謹母病兄弟三人在白日侍夜燃火忽見帳帶須臾聞床前狗𦣻聲舉家共見一死人頭在地頸有血兩眼尚動北園中埋之明旦往視兩目在土上又埋復出及以縛著頭合理之不復出數日其母遂亡

血 18 ②

『續搜神記』曰、「新野庾謹母病。兄弟三人在白日侍。夜燃火、忽見帳帶。須臾聞床前狗𦣻聲。舉家共見、一死人頭在地。頸有血、兩眼尚動。北園中埋之。明旦往視、兩目在土上。又埋、復出。及以縛著頭合理之、不復出。數日其母遂亡。」

血 18 ③

『續搜神記』に曰く、<sup>(一)</sup>「新野の庾謹の母病む。兄弟三人白日に在り侍す。夜火を燃やし、忽ち帳帶を見る。須臾にして床前に狗の𦣻聲を聞く。家を舉げて共に見れば、一死人の頭地に在り。頸に血有り、兩眼尚ほ動く。北園中に之を埋む。明旦往きて視れば、兩目土上に在り。又た埋むれば、復た出づ。以て縛りて頭に著け合せて之を埋むるに及び、復た出でず。數日して其の母遂に亡す。」と。

血 18 ④

(一)現行十卷本『搜神後記』卷八にみえる。『太平御覽』卷八八五、妖異部一・怪に『續搜神記』からとして引用がある。「𦣻」字を「𦣻」に改めたのは『太平御覽』所引のテキストによる。この他、『太平廣記』卷三六〇、妖怪二は出處を『幽冥錄』として收録。『太平廣記』も「狗𦣻聲」に作る。

血 19 ①

幽冥錄曰綏母堂上子姪姪夜集忽有一物從床墮地視乃死人頭流血滂沱後誅滅也

血 19 ②

『幽冥錄』曰、「綏母堂上、子<sup>●</sup>(姪)姪夜集。忽有一物。從床墮地。視乃死人頭。流血滂沱。後誅滅也。」

血 19 ③

『幽冥錄』に曰く、<sup>(一)</sup>「綏母堂上に、子姪夜集まる。忽ち一物有り。床從り地に墮つ。視れば乃ち死人の頭なり。流血滂沱なり。後誅滅せらるるなり。」と。

血 19 ④

(一)『幽明録』佚文と同じ話は見つけられなかったが、『古小説鉤沈』本第 233 条は、宋初に義興の周超の妻が実家で生首を見、その後周超が罰せられたというもので、内容が類似している。第 233 条は『太平御覽』卷八八五、妖異部一・怪、『太平廣記』卷一四一、徴應七所収。

#### 血 20 ①

雜灾日子日有血有疾病一云縣官丑日為疾病一云小口皆凶寅日為口舌亡財卯日為縣官亡沒辰日為六畜巳日為死亡午日為亡遺一云家屯末日為疾病一云中子申日為遠行一云主母酉日為死亡一云長婦戌日憂用宅一云下賤亥日為婦女一云六畜血汙室中為死亡血汙巾慎為懸官血汙器物下為賤遇血汙衣被有死亡血汙門戶壁床飛櫓至血汙竈清屋履展兵死血汙物器下賤血汙小憤縣官血汙食器夏子血汙瓦器奴婢血汙書籍及大誠煞小口奴婢堂屋中无故血憂揚兵口舌卅日至血符法

#### 血 20 ②

『雜災』曰、「子日有血、有疾病。一云、縣官。丑日為疾病。一云、小口皆凶。寅日為口舌、亡財。卯日為縣官。亡沒。辰日為六畜。巳日為死亡。午日為亡遺。一云、家屯。末日為疾病。一云、中子。申日為遠行。一云、主母。酉日為死亡。一云、長婦。戌日憂用宅。一云、下賤。亥日為婦女。一云、六畜。血汚室中、為死亡。血汚巾、慎為懸官。血汚器物、下為賤遇。血汚衣被、有死亡。血汚門戶・壁床、飛櫓至。血汚竈清屋・履展、兵死。血汚物器、下賤。血汚小憤、縣官。血汚食器、夏子。血汚瓦器、奴婢。血汙書籍及大誠、殺小口・奴婢。堂屋中無故血、憂揚兵・口舌、卅日、至血符法。」

#### 血 20 ③

『雜災』に曰く、<sup>(一)</sup>

子日 血有り、疾病有り。一に云ふ、県官なり、と。

丑日 疾病を爲す。一に云ふ、小口皆凶なり、と。

寅日 口舌を爲す。財を亡ふ。

卯日 縣官と爲る。亡没す。

辰日 六畜と爲る。

巳日 死亡と爲る。

午日 亡遺と爲る。一に云ふ、家屯す、と。

末日 疾病と爲る。一に云ふ、中子なり、と。

申日 遠行と爲る。一に云ふ、母を主さどる、と。

酉日 死亡と爲る。一に云ふ、長婦なり、と。

戌日 宅を用ふるを憂ふ。一に云ふ、下賤なり、と。

亥日 婦女と爲る。一に云ふ、六畜なり、と。

血室中を汚せば、死亡と爲る。

血巾を汚せば、慎みて懸官と爲る。

血器物を汚せば、下りて賤遇と爲る。

血衣被を汚せば、死亡有り。

血門戸・壁床を汚せば、飛こつ楯至る。

血竈清屋・履展を汚せば、兵死す。

血物器を汚せば、下賤なり。

血小憤を汚せば、縣官なり。

血食器を汚せば、夏子なり。

血瓦器を汚せば、奴婢なり。

血書籍及び大誠を汚せば、小口・奴婢を殺す。

堂屋中故無く血あれば、揚兵・口舌を憂ふること、卅日にして、血符の法に至る。」と。

#### 血 20 ④

(一)出典未詳。後半の「血汚〇〇」まで『雜災』の佚文であるか否かも未詳。『漢書』卷三〇、藝文志・六藝略・易に『雜災異』三十五篇の著録あり。

#### 血 21 ①

血ト ① 〈堂屋中无故血干及大吉〉 局ト ① 〈宅中及身衣服見血光厭吉也〉 血ト ① 器ト ① 〈衣服麻器血厭吉也〉。

#### 血 21 ②

血ト ② 〈堂屋中無故血。干及大吉。〉 局ト ② 〈宅中及身衣服見血光、厭吉也。〉 血ト ② 器ト ② 〈衣服麻器血、厭吉也。〉

#### 血 21 ③

血ト ③ ① 〈堂屋中故無く血ありて、干かはけば大吉に及ぶ。〉 局ト ③ 〈宅中及び身衣服血の光るを見れば、厭吉なり。〉 血ト ③ 器ト ③ 〈衣服麻器血あれば、厭吉なり。〉

#### 血 21 ④

(一)出典未詳。

(佐野誠子)

## 四、 肉

### 【概要】

肉にまつわる怪異の記述を集める。

肉 01 ①

穴〈如陸反入〉

肉 01 ②

肉〈如陸反。入〉

肉 01 ③

肉<sup>(一)</sup>〈如陸反。入〉

肉 01 ④

(一)『玉篇』卷七肉部「肉」字、『廣韻』卷五「肉」字「如六切」。

肉 02 ①

魏志曰公孫淵將亡襄平北市生肉長圍各數三尺有頭曰口啄無手足而初占曰有形不成有體無聲其國滅亡

肉 02 ②

『魏志』曰、「公孫淵將亡、襄平<sup>□</sup>北市生肉。長圍各數尺、有頭<sup>□</sup>目口啄、無手足而<sup>□</sup>動搖。初占曰、『有形不成、有體無聲、其國滅亡。』」

肉 02 ③

『魏志』に曰く、「<sup>(一)</sup>公孫淵將に亡びんとするとき、襄平の北市肉生ず。長圍 各の數尺、頭目口啄有り、手足無くして動搖す。初占に曰く、『形有りて成らず、體有りて聲無ければ、其の國滅亡す。』」と。

肉 02 ④

(一)『三國志』卷八、魏書・公孫淵傳、『晉書』卷二八、五行志・赤眚赤祥にみえる。他、『宋書』卷三二、五行志・赤眚赤祥にも『晉書』五行志とほぼ同文あり。

肉 03 ①

前趙錄曰建元<sup>レ</sup>年流星赴于牽牛入紫微龍形委地昭地落於平陽北千<sup>[1]</sup>里視之則肉鼻聞于平陽穴旁常有哭聲晝夜不止劉后產一蛇一虎各客人而走害旁劉后卒乃哭此肉哭亦止

[1]「千」尊經閣本は「十」に作る。

肉 03 ②

『前趙錄』曰、「建元元年、流星赴于牽牛、入紫微。龍形委蛇<sup>□</sup>、昭地、落於平陽北<sup>○</sup>十里。視之則肉。鼻聞于平陽。肉旁常有哭聲、晝夜不止。劉后產一蛇一虎、各客人而走害旁。劉后卒、乃哭。此肉哭亦止。」

肉 03 ③

『前趙錄』に曰く、「<sup>(一)</sup>建元元年、流星牽牛より<sup>はし</sup>赴り、紫微に入る。龍形にして委蛇し、地を<sup>て</sup>昭らし、平陽の北十里に落つ。之を視れば則ち肉なり。鼻<sup>きこ</sup>平陽に聞ゆ。肉旁常に哭聲有り、



晝夜止まず。劉后一蛇一虎を産み、各の客人にして走りて旁を害す。劉后卒するに、乃ち哭す。此の肉の哭も亦た止む。」と。

肉 03 ④

(一)『前趙錄』は崔鴻『十六國春秋』を構成するもの。『隋志』史部霸史類に『十六國春秋』一百卷、魏崔鴻撰とある。『太平御覽』卷一一九、偏霸部三・劉曜に『崔鴻十六國春秋・前趙錄』からとして引用がある。その他『太平御覽』卷一四二、皇親部八・小劉后所引の『崔鴻三十國春秋』、『魏書』卷九五、匈奴劉聰傳、『晉書』卷二八、五行志・赤眚赤祥にも類似した文がみられる。『宋書』五行志にはなし。

肉 04 ①

世語曰中書令下拜於廁上見兩因如人眼尋被誅

肉 04 ②

『世語』曰、「中書令下拜於廁、上見兩因、如人眼。尋被誅。」

肉 04 ③

『世語』に曰く、「<sup>(一)</sup>中書令下りて廁に拜すれば、上に兩因の人眼の如きなるを見る。尋いで誅せらる。」と。

肉 04 ④

(一)出典未詳。『世語』は、『隋志』史部雜史類に『魏晉世語』十卷晉襄陽令郭頒撰とある書を指すか。本文には「肉」字が含まれない。兩因と翻字した箇所が本来は「肉」字であったか。

肉 05 ①

災異曰云目狀如目三重色黃煞之直死也土口齒三重色黃毀之得語直死□□掘地得手名曰封物〈狀如人手〉享而食之有酒塩味使人美氣力無疾病掘地得穴是謂地賊〈狀如青漏之也〉還其處有錢當之則死

肉 05 ②

『災異曰』云、「目狀如目三重、色黃、殺之直死也。土口齒三重、色黃、毀之得語直死。」「□□掘地得手、名曰封物。〈狀如人手。〉烹而食之、有酒鹽味。使人美氣力、無疾病。掘地得肉、是謂地賊。〈狀如青漏。之也。〉還其處、有錢。當之則死。」

肉 05 ③

『災異曰』に云ふ、「<sup>(一)</sup>目の狀目三重の如くして、色黃、之を殺せば直ちに死するなり。土口齒三重にして、色黃、之を毀てば語を得て直ちに死す。」と。<sup>(二)</sup>「□□地を掘りて手を得れば、名を封物と曰ふ。〈狀は人手の如し。〉烹て之を食らへば、酒鹽の味有り。人をして氣力を美しくし、疾病を無からしむ。地を掘りて肉を得れば、是れを地賊と謂ふ。〈狀は青漏の如し。之なり。〉其の處に還せば、錢有り。之に当たれば則ち死す。」と。

肉 05 ④

(一)出典未詳。『災異曰』は『隋志』に著録なし。あるいは「『災異』曰云」と、「曰」と「云」が重複して書かれていたか。

(二)S.6261「白澤精怪圖」には、「掘地〔 〕也。其狀如〔 〕當有錢」の文言、またそれに引き続いて、地面を掘り、それぞれ「人」「人手」「狗」「豕」を得た場合についての類似した説明がある。うち「人手」についての一文は、「掘地得人手者、名曰口也。亨而食之、有酒味。使人美氣無病。亦名郢」とあり、この『天地瑞祥志』の文と重なるところが多い。また、明・徐應秋『玉芝堂談薈』卷二五「地中物如小兒手」が宋・江休復の『江鄰幾雜志』の河でこどもの指のない手を手に入れたことをするす文を引用したのち、『白澤圖』に言及して、「『白澤圖』所謂封、食之多力者也。或曰封即塋也。食之、無疾」と引く。この『白澤圖』佚文も『天地瑞祥志』當該文に類似する。この文は、前の『災異（曰）』の文ではなく、空白二字のところに本来『白澤圖』の書名があった可能性もあるだろう。佐々木聡「『白澤精怪圖』再考」（『敦煌寫本研究年報』11、2017年）及び游自勇「敦煌本『白澤精怪圖』校録一『白澤精怪圖』研究之一」（『敦煌吐魯番研究』12、上海古籍出版社2011年）参照。

（佐野誠子）

## 五、 毛

### 【概要】

空から毛が降ってきたり、地面から毛が生えたりという怪異の記述を取り扱う。

毛 01 ①

毛〈莫高反平〉

毛 01 ②

毛〈莫高反。平〉

毛 01 ③

毛<sup>(一)</sup>〈莫高の反。平〉

毛 01 ④

(一)『玉篇』卷二六毛部「毛」字「莫刀切」、『廣韻』卷二「毛」字「莫袍切」。

毛 02 ①

春秋潭潛巴曰其有赤毛不死則逃履下生毛不死尅逃〈宋均曰赤血亦死祥毛從風倚逃麋象也〉

毛 02 ②

『春秋潛潭巴』曰、「其有赤毛、不死則逃。履下生毛、不死剋逃。」〈宋均曰、「赤血亦死祥。毛從風倚、逃應象也。」〉

毛 02 ③

『春秋潛潭巴』に曰く、「<sup>(一)</sup>其れ赤毛有りて、死せざれば則ち逃げる。履下に毛を生じ、死せざれば剋逃す。」と。〈宋均曰く、「赤血も亦た死祥なり。毛風に従ひて倚るは、逃の應象なり。」と。〉

毛 02 ④

(一)該當資料なし。この文は、**血 03**に類似する。宋均の注はここのみにみられる。

毛 03 ①

史記曰趙王遷時民譌言曰奏為咲趙則川蹄為不信視地之生毛後五年地果生毛七年而奏滅趙

毛 03 ②

『史記』曰、「趙王遷時、民譌言曰、『秦爲笑、趙則（川）號。以爲不信、視地之生毛。』後五年地果生毛。七年而秦滅趙。」

毛 03 ③

『史記』に曰く、「<sup>(一)</sup>趙王遷の時、民譌言して曰ふ、『秦笑ひを爲せば、趙則ち號す。以て不信を爲せば、地を視るに之毛を生ぜん。』と。後五年地果して毛を生ず。七年秦趙を滅ぼす。」と。

毛 03 ④

(一)『史記』卷四三、趙世家にみえる。また、『唐開元占經』卷四、地生毛にも『史記』からとしての引用あり。

毛 04 ①

京房妖占曰天雨毛羽貴人出走地生毛百姓勞

毛 04 ②

『京房妖占』曰、「天雨毛羽、貴人出走。地生毛、百姓勞。」

毛 04 ③

『京房妖占』に曰く、「<sup>(一)</sup>天毛羽を雨らせば、貴人出走す。地毛を生ずれば、百姓<sup>つか</sup>勞る。」と。

毛 04 ④

(一)『京房妖占』は『隋志』に著録なし。『京房易妖』（こちらにも『隋志』に著録なし、『晉書』『宋書』五行志などに引用がある）を指すか。「天雨毛羽、貴人出走」は、『晉書』卷二八、五行志・白雉白祥に『易妖』日として引用あり。「地生毛、百姓勞」は、**毛 06**の『晉中興書』に類似の記述がある。『宋書』卷三一、五行志・白雉白祥にもほぼ同文あり。

毛 05 ①

華陽國志曰太始八年蜀地生毛如白毫<sup>□</sup>一<sup>□</sup>二<sup>□</sup>夕長七八寸生數里季飲于地又連生毛

毛 05 ②

『華陽國志』曰、「太始八年蜀地生毛如白毫<sup>□</sup>。三<sup>□</sup>夕、長七八寸、生數里。季飲于地、又連生毛。」

毛 05 ③

『華陽國志』に曰く、<sup>(一)</sup>「太始八年蜀地 毛を生じ白毫の如し。三夕にして、長さ七八寸、數里に生ず。季<sup>すえ</sup>地に飲まれ、又た連なりて毛を生ず。」と。

毛 05 ④

(一)『華陽國志』卷八、大同志にみえる。『太平御覽』卷八八〇、咎徵部七・地生毛が、常璩『華陽國志』よりとして引用し、『晉書』卷二八、五行志・白眚白祥及び『宋書』卷三一、五行志・白眚白祥に、「武帝泰始八年五月、蜀地雨白毛」の文言あり。この記事に毛 04 にみえる『易妖』が引用される。

毛 06 ①

晉中興書徵祥說曰秦漢以來未記生地毛者唯趙地生毛長尺餘而為秦所滅太元二年地毛父老云地生毛民將勞是時謝玄擊苻民無停歲十四年地生毛其後王室大亂隆安四年地生毛後義旗興後民人勞苦〈隆安趙居住曰震生毛或黑或白也〉

毛 06 ②

『晉中興書』徵祥說曰、「秦漢以來、未記生地毛者、唯趙地生毛、長尺餘而為秦所滅。太元二年、地生毛。父老云、『地生毛、民將勞。』是時謝玄擊苻民無停。歲十四年、地生毛。其後、王室大亂。隆安四年、地生毛。後義旗興後、民人勞苦。」〈『隆安起居注』曰、「震生毛、或黑或白也。」〉

毛 06 ③

『晉中興書』徵祥說到曰く、<sup>(一)</sup>「秦漢以來、未だ地に毛を生ずるを記す者あらず、唯だ趙の地毛を生じて、長さ尺餘りにして秦の滅す所と爲る。太元二年、地毛を生ず。父老云ふ、<sup>(二)</sup>『地毛を生ずれば、民將に<sup>つか</sup>勞れんとす。』」と。是の時謝玄 苻の民を撃ちて停まること無し。歲十四年、地毛を生ず。其の後王室大いに亂る。隆安四年、地毛を生ず。後義旗興りて後、民人勞苦す。」と。〈『隆安起居注』に曰く、<sup>(三)</sup>「震ありて毛を生ずれば、或いは黒 或いは白なり。」と。〉

毛 06 ④

(一)該當資料なし。『晉書』卷二八、五行志・白眚白祥及び『宋書』卷三一、五行志・白眚白祥に類似した文あり。  
(二)『唐開元占經』卷四、地生毛に「『易妖占』曰、「地生毛、百姓勞苦。」とある。  
(三)該當資料なし。『隆安起居注』は『隋志』史部起居注類に『晉隆安起居注』十卷との著録あり。

## 六、衣服

### 【概要】

衣服に関する怪異の記述を集める。五行志の分類でいう服妖の事象を主にとりあげる。

#### 衣服 01 ①

衣服〈於希反平狹陸反入〉

#### 衣服 01 ②

衣服〈於希反、平。狹陸反、入。〉

#### 衣服 01 ③

衣服<sup>(一)</sup>〈於希の反、平。<sup>(二)</sup>狹陸の反、入。〉

#### 衣服 01 ④

(一)『玉篇』卷二八、衣部「衣」字「於祈切」、『廣韻』卷四「衣」字「於既切」。『古今韻會舉要』卷二「衣」字「於希反」。

(二)『玉篇』に「服」字なし。『廣韻』卷五「服」字「房六切」。「狹陸反」の反切注例はなし。

#### 衣服 02 ①

漢書五行志曰人君風俗狂慢變節易度則為剽輕有奇恠之〈其由在人貌篇也〉

#### 衣服 02 ②

『漢書五行志』曰、「人君風俗狂慢、變節易度、則爲剽輕有奇怪之<sup>□</sup>服〈其由、在人貌篇也。〉

#### 衣服 02 ③

『漢書五行志』に曰く、「<sup>(一)</sup>人君の風俗狂慢にして、節を變へ度を易ふれば、則ち剽輕を爲し奇怪の服有り。」と。〈其の由は、人貌篇に在るなり。〉

#### 衣服 02 ④

(一)『漢書』卷二七中之上、五行志にみえる。貌不恭の災異に相当する。

#### 衣服 03 ①

左氏傳閔公二年晉獻公使大子申生帥師〈師古曰以伐東山臯落氏也〉公衣人偏衣佩之金玦〈師古曰偏衣謂左右異色其半象公之服也金玦以金為決也半環曰玦之也〉狐寔歎曰時事之徵也衣身之章也佩喪之旗也〈師古曰狐寔晉大夫伯行時為太子御戎也徵證也明也旗表也衣以所明貴賤佩所以表中心之〉衣以彪服遠其形也〈師古曰彪雜色也謂偏衣遠離〉佩以金玦棄其喪也服以遠之時以閔之彪涼冬殺金寒玦離胡可恃也〈師古曰涼薄也閔閑也冬主煞烝金行在西是謂之寒玦

形半缺故離也〉罕夷曰彪奇無常金玦不復君有心矣〈應劭曰奇、怪非常意復反也金玦猶決去不反意師古曰罕夷晉大夫時為百軍卿也有心<sup>[1]</sup>害太子之心之〉後四年申生以讒自殺近服妖也  
[1]「心」字傍書で追加される。

#### 衣服 03 ②

『左氏傳』閔公二年、<sup>□</sup>「晉獻公使太子申生帥師〈師古曰、「以伐東山臯落氏也。」〉公衣<sup>□</sup>（人）偏衣、佩之金玦。〈師古曰、「偏衣、謂左右異色、其半象公之服也。金玦、以金爲玦也。半環曰玦。」之也。〉狐突歎曰、「時、事之徵也。衣、身之章也。佩、喪之旗也。〈師古曰、「狐突、晉大夫伯行、時爲太子御戎也。徵、證也、明也。旗、表也。衣<sup>□□</sup>所以明貴賤、佩所以表中心。」之也。〉衣以彪服、遠其形也。〈師古曰、「彪、雜色也。謂偏衣。」遠、離。〉佩以金玦、棄其喪也。服以遠之、時以悶之。彪涼冬殺、金寒玦離、胡可恃也。〉〈師古曰、「涼、薄也。悶、閑也。冬主殺氣、金行在西。是謂之寒。玦形半缺、故離也。〉罕夷曰、「彪奇無常。金玦不復。君有心矣。」〈應劭曰、「奇、奇怪非常意。復、反也。金玦、猶決。去不反意。」師古曰、「罕夷、晉大夫。時爲<sup>□</sup>百軍卿也。有心、害太子之心。」之也。〉後四年、申生以讒自殺。近服妖也。」

#### 衣服 03 ③

『左氏傳』閔公二年、<sup>(一)</sup>「晉の獻公太子申生をして師を帥ゐらせしむ。〈師古曰く、「以て東山の臯落氏を伐つなり。」と。〉公偏衣を衣、之を佩するに金玦をもってす。〈師古曰く、「偏衣は、左右色を異にし、其の半は公の服を象るを謂ふなり。金玦は、金を以て玦と爲すなり。半環を玦と曰ふ。」と。之なり。〉狐突歎きて曰く、「時は、事の徵なり。衣は、身の章なり。佩は、喪の旗なり。〈師古曰く、「狐突は、晉の大夫伯行、時に太子の御戎と爲るなり。徵は、證なり、明らかにするなり。旗は、表なり。衣は以て貴賤を明らかにする所、佩は以て中心を表す所なり。」と。之なり。〉衣るに彪服を以てするは、其の形より遠ざかるなり。〈師古曰く、「彪は、雜色なり。偏衣を謂ふ。」と。遠は、離なり。〉佩するに金玦を以てするは其の喪を棄つるなり。服は以て之を遠ざけ、時は以て之を悶<sup>とぎ</sup>し、彪は涼しく冬は殺し、金は寒く玦は離る<sup>なん</sup>、胡ぞ恃むべけんや。」と。〈師古曰く、「涼は薄なり。悶は閑なり。冬は殺氣を主り、金行して西に在り。是れ之を寒と謂ふ。玦形半缺す、故に離るるなり。」と。〉罕夷曰く、「彪奇は常無く、金玦復らず。君心有るなり。」と。〈應劭曰く、「奇は、奇怪にして常に非ざる意なり。復は反なり。金玦は猶ほ決のごとし。去りて反らざるの意なり。」と。師古曰く、「罕夷は、晉の大夫なり。時に下百軍卿と爲るなり。有心は、太子を害するの心なり。」と。之なり。〉後四年、申生讒を以て自殺す。服妖に近きなり。」と。

#### 衣服 03 ④

(一)『左傳』閔公二年及び『漢書』卷二七中之上、五行志にみえる。服妖に相当する。本文及び注は『漢書』五行志によっている。

#### 衣服 04 ①

左氏傳鄭子滅故為聚鵠之冠〈韋昭曰今翠鳥也師古曰子滅鄭父公子也鵠大鳥良戰國所云啄蚌

者也鷩鳥知天時也音事又音術之也〉鄭父公惡之盜殺之〈師古曰時得罪出奔宋故使盜煞之於陳宋之間之也〉劉閔以為近服妖者也一日非獨為于臧之身亦父公之戒也動父公不禮晉父也〈師古曰晉文公之為公子也辟驪姬之雉而出奔欲之楚過鄭之不禮之也〉又犯周天子命而伐滑後晉父伐鄭幾亡國也

#### 衣服 04 ②

『左氏傳』、「鄭子臧故為聚鷩之冠。〈韋昭曰、「今翠鳥也。」師古曰、「子臧、鄭文公子也。鷩、大鳥。良『戰國策』所云啄蚌者也。鷩鳥知天時也。音聿、又音術。」之也。〉鄭文公惡之、盜殺之。〈師古曰、「時得罪出奔宋、故使盜殺之於陳、宋之間。」之也。〉劉向以為近服妖者也。一日、非獨為子臧之身、亦文公之戒也。動文公不禮晉文也〈師古曰、「晉文公之為公子也。辟驪姬之難而出奔。欲之楚、過鄭、之不禮。」之也。〉又犯周天子命而伐滑、後晉文伐鄭、幾亡國也。」

#### 衣服 04 ③

『左氏傳』、「鄭子臧、故に聚鷩の冠を爲る。〈韋昭曰く、「今の翠鳥なり。」と。師古曰く、「子臧は、鄭の文公の子なり。鷩は、大鳥なり。良に『戰国策』云ふ所の蚌を啄む者なり。鷩鳥は天時を知るなり。音は聿、又た音は術なり。」と。之なり。〉鄭の文公之を惡み、盗みて之を殺す。〈師古曰く、「時に罪を得て宋に出奔し、故に盜をして之を陳、宋の間に殺さしむ。」と。之なり。〉劉向以為らく服妖に近き者なり。一に曰く、獨だ子臧の身を爲すのみに非ず、亦た文公の戒なり。動れば文公 晉文を禮せざるなり。〈師古曰く、「晉の文公の公子為るや、驪姬の難を辟け出奔す。楚に之かんと欲して、鄭に過ぎる、之を禮せざる。」と。之なり。〉又た周の天子の命を犯して滑を伐ち、後晉文 鄭を伐ち、幾ど國を亡ぼすなり。」と。

#### 衣服 04 ④

(一)『左傳』僖公二四年及び『漢書』卷二七中之上、五行志にみえる。服妖に相當する。文及び注は『漢書』五行志によっている。また『漢書』五行志では、衣服 03 に引きつ續いてみられる條である。

#### 衣服 05 ①

昭帝時昌邑王賀遣中大去之長安多治側注冠〈應昭曰今冠是也師古曰側注者言其形側立師不注也〉以賜大臣又以冠如劉而以為近服妖也時王賀狂諛〈師古曰諛戍也音布内反〉聞天子不豫也冠者尊服奴者賤人賀無故奴非常之冠暴尊象也以冠奴者當自至尊墜至賤也其後貧狂乱無道大臣白皇太后度賀為庶人賀為主時又見大白狗冠方山冠而無尾〈劉后曰方山冠五采為之樂舞人所服之也〉此服妖亦犬舛也賀既度數年宣帝封之為列侯復有皐死犬無尾之效也京房易傳曰行不順厥咎人奴冠天下乱辟無〈辟君也適子也之〉妾子拌〈无適子故之也〉又曰君不正臣欲篡厥妖狗冠出朝門

#### 衣服 05 ②

「昭帝時、昌邑王賀遣中大去之長安、多治側注冠。〈應劭曰、「今冠是也。」師古曰、「側注

者言其形側立而下注也。』〉以賜大臣、又以冠奴。劉向以爲近服妖也。時王賀無故狂悖〈師古曰、「悖、惑也。音布内反。」〉聞天子不豫也。冠者尊服、奴者賤人。賀無故好非常之冠、暴尊象也。以冠奴者、當自至尊墮至賤也。其後、賀狂亂無道、大臣白皇太后、廢賀爲庶人。賀爲主時、又見大白狗冠方山冠而無尾〈劉向曰、「方山冠五采爲之、樂舞人所服。」之也。〉。此服妖、亦犬禍也。賀既廢數年、宣帝封之爲列侯、復有皐、死犬無尾之效也。京房『易傳』曰、『行不順、厥咎人奴冠。天下亂、辟無適。〈辟、君也。適、適子也。之也。〉妾子拜。』〈無適子故。之也。〉又曰、『君不正、臣欲篡、厥妖狗冠出朝門。』

#### 衣服 05 ③

(一) 昭帝の時、昌邑王賀中大夫をして長安に之かしめ、多く側注冠を治む。〈應劭曰く、「今の冠は是れなり。」と。師古曰く、「側注は、其の形の側立して下注するを言ふなり。」と。〉以て大臣に賜ひ、又た以て奴に冠す。劉向以爲らく服妖に近きなり。時に王賀故無く狂悖して〈師古曰く、「悖は、惑なり。音は布内の反。」〉天子の豫へざるを聞くなり。冠は尊服、奴は賤人なり。賀の故無く非常の冠を好むは、暴かに尊たる象なり。以て奴に冠するは、當に至尊自り至賤に墮つるべきなり。其の後、賀狂亂にして道無く、大臣皇太后に白し、賀を廢して庶人と爲す。賀の主爲る時、又た大白狗の方山冠を冠りて尾無きを見る〈劉向曰く、「方山冠は五采もて之を爲し、樂舞人の服する所なり。」と。之なり。〉。此れ服妖にして、亦た犬禍なり。賀既に廢さるること數年、宣帝之を封じて列侯と爲すも、復た皐有り、死犬尾無きの效なり。京房『易傳』に曰く、『行きて順ならざれば、厥の咎人奴冠す。天下亂れ、辟に適無ければ、〈辟は、君なり。適は、適子なり、と。之なり。〉妾子拜せらる。』と。〈適子無きが故なり。之なり。〉又た曰く、『君不正にして、臣篡はんと欲すれば、厥の妖狗冠して朝門より出づ。』と。

#### 衣服 05 ④

(一) 『漢書』卷二七中之上、五行志にみえる。服妖に相當する。衣服 04 に引き続いたもの。末尾の京房『易傳』も『漢書』五行志に引用されているもの。

#### 衣服 06 ①

續漢五行志曰靈帝好胡服胡帳胡床胡飯胡以空胡笛胡舞京都貴戚皆競爲之此服妖其後董卓多懼胡兵虜掠宮掖也延喜中京師長者木履後黨事起九強拘擊木履之妖也

#### 衣服 06 ②

『續漢五行志』曰、「靈帝好胡服、胡帳、胡床、胡飯、胡空侯、胡笛、胡舞、京都貴戚皆競爲之。此服妖。其後董卓多擁胡兵、虜掠宮掖也。」「延喜中、京師長者木履。後黨事起、九族拘繫。木履之妖也。」

#### 衣服 06 ③

『續漢五行志』に曰く、「靈帝胡服、胡帳、胡床、胡飯、胡空侯、胡笛、胡舞を好み、京都の貴戚皆競ひて之を爲す。此れ服妖なり。其の後董卓多く胡兵を擁し、宮掖を虜め掠るな



り。」と。<sup>(二)</sup>「延喜中、京師の長者木履す。後黨事起き、九族拘繫せらる。木履の妖なり。」と。

#### 衣服 06 ④

- (一)『続漢書』志第一三、五行志・服妖にみえる。他、『藝文類聚』卷四四、樂部四・箜篌、『北堂書鈔』卷一一〇、樂部六・箜篌、『太平御覽』卷九二、皇王部一七・孝靈皇帝（以上すべて『續漢書』あるいは『續漢書』五行志を出處とする）、『太平御覽』卷六九九、服妖部一・帳（『風俗通』を出處とする）にもあり。
- (二)『續漢書』志第一三、五行志・服妖にみえる。他、『太平御覽』卷六四四、刑法部一〇・械（『風俗通』を出處とする）にもあり。

#### 衣服 07 ①

援神記曰昔初作履者婦人員頭男方頭員者順之義蓋可以則男女也大康初婦人皆方頭与男無別也履者人所踐而行下民之象也

#### 衣服 07 ②

『搜神記』曰、「昔初作履者、婦人員頭、男方頭。員者順之義。蓋可以則男女也。太康初、婦人皆方頭、與男無別也。」「履者人所踐而行。下民之象也。」

#### 衣服 07 ③

『搜神記』に曰く、<sup>(一)</sup>「昔初め履を作すは、婦人員頭にして、男方頭なり。員は順の義。蓋し以て男女に則るべきなり。太康の初め、婦人皆方頭にして、男と別無きなり。」と。<sup>(二)</sup>「履は人の踐みて行く所なり。下民の象なり。」と。

#### 衣服 07 ④

- (一)『搜神記』卷七にみえる。他、『唐開元占經』卷一一四、履改變、『太平御覽』卷六九八、服章部十五・屐にも『搜神記』からとして引用がある。『晉書』卷二七、五行志・服妖、『宋書』卷三〇、五行志・服妖にも出處を示さないほぼ同文がみられる。
- (二)『搜神記』卷七「元康太安之間、江淮之域、有敗屨自聚於道……」の記事にある干寶の評語「屨者、人之賤服而當勞辱、下民之象也」が類似した内容か。同内容は『宋書』卷三〇、五行志・服妖にも干寶の語としてみえ、「屨」を「編」に作る。

#### 衣服 08 ①

魏書曰父帝甄皇舌每寢家中髣髴見有如人持玉衣覆其上吉象也

#### 衣服 08 ②

『魏書』曰、「文帝甄皇后、每寢、家中髣髴見有如人、持玉衣覆其上。吉象也。」

#### 衣服 08 ③

『魏書』に曰く、<sup>(一)</sup>「文帝甄皇后、寢る毎に、家中に髣髴として人の如き有りて、玉衣を持ち其の上を覆ふを見る。吉象なり。」と。

#### 衣服 08 ④

(一)『三國志』卷五、魏書・后妃伝裴松之注所引『魏書』にみえる。

#### 衣服 09 ①

瑞応畺曰王者政平教民種殖則渠搜人來獻裘又曰王者德不恥惡衣則西夷乘白鹿來獻白裘也

#### 衣服 09 ②

『瑞應圖』曰、「王者政平、教民種殖、則渠搜人來獻裘。」又曰、「王者德不恥、惡衣、則西夷乘白鹿來獻白裘也。」

#### 衣服 09 ③

『瑞應圖』に曰く、「<sup>(一)</sup>王者の政平らかにして、民に種殖を教うれば、則ち渠搜の人來たりて裘を獻ず。」と。又た曰く、「王者は德ありて恥ぢず、衣を惡めば、則ち西夷白鹿に乗り來たりて白裘を獻ずるなり。」と。

#### 衣服 09 ④

(一)『太平御覽』卷六九四、服章部十一・裘に『瑞應圖』からとして、この二條がまとまって引用される。『淵鑑類函』卷三七五、服飾部五・裘は、同文を『増瑞應圖』からとして引用する。

#### 衣服 10 ①

京房災異曰人衣帶自結連憂亡財口舌必至人君無故小衣服不出三年邊有意兵為升四來降後君弱臣強人君及民衣服應其常國有喪服之憂人民好變衿是上擲下急令絕刑罪也人好素服謂自喪不出三年以兵削地衆人好婦衰為德侵將軍衣無故自亡將軍旦<sup>[1]</sup>死帳幕日動為人散走各歸其家也若履無故自亡君旦不復遠行履無自著足有遠行人衣服履夜亡為臣為賊人衣忽臭賊旦來勿服衣物有光列、作聲旦有喪勿服若印綬者免官若席者賀也衆人好學諸侯之服而高其衣服不出五年奪民

[1]「旦」、尊經閣本は「且」に作る。この一段の「旦」字はすべて同様。

#### 衣服 10 ②

京房『災異』曰、「人衣帶、自結連、憂亡財、口舌必至。人君無故小衣服、不出三年、邊有意兵、為升四、來降、後君弱臣強。人君及民衣服不應其常、國有喪服之憂。人民好變衿、是上擲、下急、令絕刑罪也。人好素服謂自喪、不出三年、以兵削地。衆人好婦衰、為德侵。將軍衣無故自亡、將軍旦死。帳幕自動、為人散走、各歸其家也。若履無故自亡、君旦不復遠行。履無自著足、有遠行。人衣服・履夜亡、為臣為賊。人衣忽臭、賊旦來。勿服。衣物有光列、列作聲、且有喪。勿服。若印綬者、免官。若席者、賀也。衆人好學諸侯之服、而高其衣服、不出五年、奪民。」

#### 衣服 10 ③

京房『災異』に曰く、<sup>(一)</sup>「人の衣帶、自ら結連すれば、財を亡ふを憂ひ、口舌必ず至る。人君故無く衣服を小さくすれば、三年を出でずして、邊に兵を意<sup>おも</sup>ふ有りて、升四と爲り、來たりて降り、後君弱く臣強し。人君及び民の衣服其の常に應ぜざれば、國喪服の憂有り。人民變衿を好めば、是れ上<sup>にぎ</sup>摻り、下急ぎ、罪を刑すること絶えしむるなり。人素服を好むを自喪と謂ひ、三年を出でずして、兵を以て地を削らる。衆人婦の袞<sup>こん</sup>を好めば、徳の侵すところと爲る。將軍の衣故無く自ら亡<sup>う</sup>せれば、將軍且に死せんとす。帳幕自ら動けば、人の散り走り、各の其の家に歸るを爲すなり。若し履故無く自ら亡<sup>う</sup>せれば、君且に復た遠行せんとす。履自づから足に著く無ければ、遠行する有り。人の衣服・履夜亡<sup>き</sup>せれば、臣と爲り賊と爲る。人衣忽ち臭えば、賊且に來たらんとす。服<sup>き</sup>る勿れ。衣物に光列有り、列<sup>つら</sup>なりて聲を作せば、且に喪有らんとす。服<sup>き</sup>る勿れ。若し印綬ならば、官を免ぜらる。若し席ならば、賀せらる。衆人諸侯の服を學ぶを好み、其の衣服を高くすれば、五年を出でずして、民を奪はる。」と。

#### 衣服 10 ④

(一)『唐開元占經』卷一一四、慘頭に一部類似した文章がある。「京氏云、民人皆好素服者、民多喪期三年。衆人好學諸侯之服而高其衣服。不出五年、失民」。

(佐野誠子)

## 七、 床

### 【概要】

床は寝台のこと。『京房易』からの一條のみを攷める。

#### 床 01 ①

床〈狀良反平〉

#### 床 01 ②

床〈狀良反。平〉

#### 床 01 ③

床<sup>(一)</sup>〈狀良の反。平〉

#### 床 01 ④

(一)「床」は「牀」の俗字。『玉篇』卷一二木部「牀」字「仕良切」、『廣韻』卷二「牀」字「士莊切」。「狀良反」の反切注例はなし。

#### 床 02 ①

京房易曰床無故自懷憂其主有縣官口舌又有分離事床无故自動君旦<sup>[1]</sup>移居又百欲煞也

[1]「旦」、尊經閣本は「且」に作る。

床 02 ②

『京房易』曰、「床無故自懷、憂其主。有縣官口舌、又有分離事。床無故自動、君且移居、又百欲殺也。」

床 02 ③

『京房易』に曰く、「<sup>(一)</sup>床故無く自ら懷るれば、其の主を憂ふ。縣官の口舌有り、又た分離の事有り。床故無く自ら動けば、君且に居を移さんとし、又た百殺さんと欲するなり。」と。

床 02 ④

(一)『唐開元占經』卷一一四、床自動に『京房易』からとして引用がある。

(佐野誠子)

## 八、 劍

【概要】

『呉越春秋』及び『離（雜？）五行書』の不思議な劍の話及び、『唐開元占經』の劍の占いを載せる。

劍 01 ①

劍〈居欠反去〉

劍 01 ②

劍〈居欠反。去〉

劍 01 ③

劍<sup>(一)</sup>〈居欠の反。去〉

劍 01 ④

(一)『玉篇』卷一七刀部「劍」字、『廣韻』卷四「劍」字等「居欠切」。

劍 02 ①

釋名曰劍拾也所以防拾非常也

劍 02 ②

『釋名』曰、「劍、檢也。所以防<sup>□</sup>檢非常也。」

02 ③

『釋名』に曰く、「<sup>(一)</sup>劍は、檢なり。非常を防檢する所以なり。」と。

劍 02 ④

(一)『釋名』釋兵にみえる。

### 劍 03 ①

吳越春秋曰越王允常躬區冶子作名劍五枚一日純劍二日湛盧三日豪曹或曰磐鄣四日莫五巨闕秦降燭善桐劍王取純劍示之薛燭瞿然智之曰沆々如芙蓉生於湖觀其父如列星之行觀其光如水之溢塘觀其父色渙々如冰將釋見日之光王曰客有買此劍者市之卿州駿馬十疋千之都二其可興乎薛燭曰不可臣聞王之造此劍赤堇之山破卞出錫若耶之渙涸而出鈎雨灑道雷公發鼓蛟龍捧鑪天帝比炭太一百觀於是區冶子固天地之釋造為此劍取湛盧示之薛燭曰義哉銜金鐵之英寄託靈服此劍者可以折衝伐敵人君有逆謀則去之元帝以魚腹湛盧豪曹獻吳王僚後闔閭為一女煞牛以送死湛盧之劍惡其无道乃去如楚昭王寤而得之召風胡子閉之此劍直幾何對曰赤堇之山已合若之溪深而不測群神上天區冶已色雖有傾誠量金珠玉稽不可與況駿馬萬戶之都乎

### 劍 03 ②

『吳越春秋』曰、「越王允常聘區冶子作名劍五枚。一日純劍、二日湛盧、三日豪曹、或曰磐鄣、四日莫腹、五巨闕。秦薛燭善相劍。王取純劍示之。薛燭瞿然望之曰、『沆沆如芙蓉生於湖。觀其文、如列星之行。觀其光、如水之溢塘。觀其文色、渙渙如冰將釋。見日之光。』王曰、『客有買此劍者、市之鄉州、駿馬十疋、千戶之都二、其可與乎。』薛燭曰、『不可。臣聞、王之造此劍、赤堇之山、破而出錫。若耶之溪、涸而出銅。雨師灑道、雷公發鼓、蛟龍捧鑪。天帝壯炭、太一百觀。於是區冶子因天地之精、造為此劍。』取湛盧示之。薛燭曰、『義哉。銜金鐵之英寄氣託靈。服此劍者、可以折衝伐敵。人君有逆謀、則去之。』允常以魚腹・湛盧・豪曹獻吳王僚。後闔閭為一女殺牛以送死。湛盧之劍、惡其無道、乃去如楚。昭王寤而得之。召風胡子問之、『此劍直幾何。』對曰、『赤堇之山已合、若耶之溪、深而不測。群神上天、區冶子已死。雖有傾城量金珠玉、稽不可與。況駿馬・萬戶之都乎。』」

### 劍 03 ③

『吳越春秋』に曰く、「越王允常 區冶子を聘して名劍五枚を作らしむ。一を純劍と曰ひ、二を湛盧と曰ひ、三を豪曹と曰ひ、或いは磐鄣と曰ひ、四を魚腹と曰ひ、五を巨闕といふ。秦の薛燭 善く劍を相る。王純劍を取りて之に示す。薛燭 瞿然として之を望みて曰く、『沆沆たること芙蓉の湖に生ずるが如し。其の文を觀れば、列星の行くが如し。其の光を觀れば、水の塘に溢るるが如し。其の文色を觀れば、渙渙たること冰の將に釋けんとするが如し。日の光を見る。』と。王曰く、『客に此の劍を買はんとする有り、之を郷州、駿馬十疋、千戶の都二もて市へば、其れ與ふべきか。』と。薛燭曰く、『可ならず。臣聞く、王の此の劍を造るや、赤堇の山、破れて錫を出だす。若耶の溪、涸れて銅を出だす。雨師道に灑ぎ、雷公鼓を發し、蛟龍は鑪を捧ぐ。天帝炭を壯んにし、太一は百觀す。是に於て區冶子 天地の精に因りて、造りて此の劍を爲す。』と。湛盧を取りて之に示す。薛燭曰く、『義なるかな。金鐵を銜

むの英氣に寄せ靈に託す。此の劍を服する者、以て折衝し敵を伐つべし。人君に逆謀有れば、則ち之を去る。』と。允常・魚腹・湛盧・豪曹を以て呉王僚に獻ず。後に闔閭一女の牛を殺す爲に以て死を送る。湛盧の劍、其の無道を惡み、乃ち去りて楚に如く。昭王寤めて之を得たり。風胡子を召して之に問ふ、『此の劍の直<sup>あたひ</sup>幾何ぞ。』と。對へて曰く、『赤堇の山已に合し、若耶の溪、深くして測れず。群神天に上り、區冶子已に死せり。城を傾けて金珠玉を量る有ると雖も、稽<sup>かんが</sup>ふるに與ふべからず。況んや駿馬・萬戸の都やをや。』と。

#### 劍 03 ④

(一)『呉越春秋』卷四、闔閭内傳闔閭三年にみえる内容だが、『藝文類聚』卷六〇、軍器部・劍所引の『呉越春秋』の文の方が類似度が高く、本文も『藝文類聚』によって校訂した。また、『初學記』卷二二、武部・劍、『太平御覽』卷三四三、兵部七十四・劍中にも『呉越春秋』からとして『藝文類聚』とほぼ同文の引用がある。

#### 劍 04 ①

離五行書曰王者得庚寅之歲欲成劍寶者春二年庚辛日齊戒先覓鐵至之方以椎菓卅砂伐猪石膏各五兩慈石三兩和合以秫汁塗箭竿燒二七枚以昭所疑地其火忽滅者即在其下穿其地下深七尺以取其鐵為鐵主〈可採歲德之上〉取七十犁刃其六分之一鐵主其六分之五以為和合常以庚辛日治之至立夏之氣國止莫行准待立秋之氣後更行也常治遁甲庚寅辛卯壬辰三時若不得三時即止莫行更待後日三時乃行又太一星遊於七宮日与庚寅時者宜治之也可以梧桐青桷炭也

#### 劍 04 ②

『離五行書』曰、「王者得庚寅之歲、欲成劍寶者、春二年庚辛日、齋戒、先覓鐵至。覓鐵至之方、以椎菓卅、砂伐猪石膏各五兩、慈石三兩和合、以秫汁塗箭竿。燒二七枚、以昭所疑地。其火忽滅者、即在其下。穿其地下深七尺、以取其鐵為鐵主。〈可採歲德之上。〉取七十犁刃、其六分之一鐵主。其六分之五以為和合、常以庚辛日治之、至立夏之氣、國止莫行。准待立秋之氣、後更行也。常治遁甲、庚寅・辛卯・壬辰三時。若不得三時、即止莫行。更待後日、三時乃行。又太一星遊於七宮。日與庚寅時者、宜治之也。可以梧桐青桷炭也。」

#### 劍 04 ③

『離五行書』に曰く、「<sup>(一)</sup>王者庚寅の歲を得て、劍寶を成さんと欲すれば、春二年庚辛の日、齋戒すれば、先づ鐵至<sup>もと</sup>を覓むべし。鐵至を覓むるの方は、椎菓卅、砂伐猪石膏各の五兩、慈石三兩を以て和合し、秫汁<sup>しゆつ</sup>を以て箭竿に塗る。二七枚を燒き、以て疑ふ所の地を昭らす。其の火忽ち滅するは、即ち其の下に在り。其の地下深さ七尺を穿ち、以て其の鐵<sup>くろがね</sup>を取りて鐵主と為す。〈歲德の上を採るべし。〉七十犁刃を取りて、其の六分の一を鐵主となす。其の六分の五を以て和合を爲し、常に庚辛日を以て之を治て、立夏の氣に至れば、國止め行ふ莫し。准じて立秋の氣を待ち、後に更めて行ふなり。常に遁甲を治むるは、庚寅・辛卯・壬辰の三時なり。若し三時を得ざれば、即ち止めて行ふ莫し。更めて後日を待ち、三時に乃ち行ふ。又た太一星七宮に遊ぶ。日と庚寅の時とは、宜しく之を治るべきなり。梧桐青桷の炭を

以てすべきなり。」と。

劍 04 ④

(一) 出典未詳。『本邦殘存』は、『雜五行書』として、『天地瑞祥志』のこの文を引用。『離五行書』、『雜五行書』とも『隋志』に著録なし。

劍 05 ①

京房易傳曰刀劍自拔憂兵也

劍 05 ②

京房『易傳』曰、「刀劍自拔、憂兵也。」

劍 05 ③

京房『易傳』に曰く、<sup>(一)</sup>「刀劍自ら抜ければ、兵を憂ふるなり。」と。

劍 05 ④

(一) 『唐開元占經』卷一一四、刀劍自拔自鳴に京房曰として引用される部分に「君刀劍無故自拔、與其室相去。君且殺」とあり、『地鏡』からとして引用される部分に「刀劍無故自拔、出及光有聲者、憂兵傷。若有血汗」とある。

(佐野誠子)

## 九、 鏡

### 【概要】

鏡の凶兆及び魔力に關する記述を載せる。

鏡 01 ①

鏡〈景併反去〉

鏡 01 ②

鏡〈景併反。去〉

鏡 01 ③

鏡<sup>(一)</sup>〈景併の反。去〉

鏡 01 ④

(一) 『玉篇』卷一八金部「鏡」字「居映切」、『廣韻』卷四「鏡」字「居慶切」。景併反の反切注例はなし。

鏡 02 ①

王隱晉書曰元帝永昌元年甘卓在襄陽照鏡不見頭後為主毀可誅安帝義熙初東陽太子守殷仲文昭鏡不見頭旬日就戮異苑曰石虎昭鏡無頭猶受誅

鏡 02 ②

王隱『晉書』曰、「元帝永昌元年、甘卓<sup>□</sup>在襄陽、照鏡不見頭。後爲主毀可誅。安帝義熙初、東陽太子守殷仲文、昭鏡不見頭。旬日就戮。」『異苑』曰、「石虎昭鏡無頭。猶受誅。」

鏡 02 ③

王隱『晉書』に曰く、「<sup>(一)</sup>元帝永昌元年、甘卓襄陽に在りて、鏡に照らすも頭を見ず。後に主の爲に毀たれ誅さるべし。」<sup>(二)</sup>「安帝義熙の初め、東陽の太子守の殷仲文、鏡に<sup>て</sup>昭らすも頭を見ず。旬日戮に就く。」と。『異苑』に曰く、「<sup>(三)</sup>石虎鏡に昭らすも頭無し。猶ほ誅を受くるがごとし。」と。

鏡 02 ④

- (一)王隱『晉書』佚文には該當資料なし。『異苑』卷四に同内容がある。また、『太平御覽』卷三五九、兵部五十・柳に『異苑』からとしての引用があり、『晉書』卷二七、五行志上・金、『宋書』卷三一、五行志二・金にも同文あり。
- (二)王隱『晉書』佚文には該當資料なし。『北堂書抄』卷一三六、照鏡不見頭に『宋武紀』からとして同内容がみえる。『宋武紀』は、『宋書』武帝紀と読めるが、現行の『宋書』にはなし。『太平御覽』卷七一七、服用部一九・鏡には『沈約宋書』からとして引用がある。『晉書』卷二七、五行志・金及び『宋書』卷三一、五行志・金にも出處を示さない同文あり。また、『異苑』卷四にも同内容がみえるが、類書に『異苑』からとしての引用なし。
- (三)現行本の『異苑』には該當資料なし。『北堂書抄』卷一三六、照鏡不見頭に『二石遺事』からとしての引用がある。『二石遺事』は『隋志』史部・霸史類の王度『二石僞治時事』二卷を指すか。

鏡 03 ①

鏡無故自破細作憂死縣官有口舌

鏡 03 ②

鏡無故自破細作、憂死、縣官有口舌。

鏡 03 ③

<sup>(一)</sup>鏡故無く自ら破れ細かく<sup>な</sup>作れば、死を憂ひ、縣官に口舌有り。

鏡 03 ④

(一)出典未詳。

鏡 04 ①

抱朴子曰或門知将来吉凶為有道乎答曰用明鏡九寸自照有所思存七日則見神仙知千里外也



鏡 04 ②

『抱朴子』曰、「或問<sup>□</sup>、『知將來吉凶、爲有道乎。』答曰、『用明鏡九寸、自照有所思。存七日、則見神仙、知千里外也。』」

鏡 04 ③

『抱朴子』に曰く、「或ひと問ふ、『將來吉凶を知るは、爲に道有るか。』と。答へて曰く、『明鏡の九寸なるを用ゐ、自ら思ふ所有るを照らす。存すること七日なれば、則ち神仙を見、千里の外を知るなり。』」と。

鏡 04 ④

(一)『抱朴子』内篇卷三にみえる。また同文が『藝文類聚』卷七〇、服飾部下・鏡、『太平御覽』卷七一七、服用部一九・鏡にもみえる。

鏡 05 ①

鏡自破符

鏡 05 ②

鏡自破符。

鏡 05 ③

鏡自ら破るるの符。

鏡 05 ④

(一)出典未詳。

(佐野誠子)

一〇、 鼎

【概要】

九鼎を中心に、諸書にみえる神器としての鼎の故事や祥瑞を載せる。

鼎 01 ①

鼎〈都珽反上〉

鼎 01 ②

鼎〈都珽反。上〉

鼎 01 ③

鼎<sup>(一)</sup>〈都珽の反。上〉

鼎 01 ④

(一)「鼎」は『玉篇』卷十六・鼎部に「鼎、丁冷切」とあり、『廣韻』卷三・「頂」小韻に「都挺切」とある。

### 鼎 02 ①

説文曰鼎三足兩耳和五味之寶器也

### 鼎 02 ②

『説文』曰、「鼎三足兩耳、和五味之寶器也。」

### 鼎 02 ③

『説文』に曰く、「<sup>(一)</sup>鼎は三足兩耳、五味を和するの寶器なり。」と。

### 鼎 02 ④

(一)本條は『説文解字』第七篇上・鼎部「鼎」字に同文がみえる。

### 鼎 03 ①

史記曰周威烈王廿三年九鼎震〈召庚曰威烈王之諡也師古曰即赧王之高祖〉金震木動之也是時周室衰微刑書而虐言令不從以乱金氣鼎者宗廟之寶器也宗廟將廢寶鼎將遷故震動也是歲晉三卿韓魏趙篡晉君而分其地威烈王命以為諸侯天子不恤周性而爵其賊臣天下不附矣後二世周致昨德於秦〈晉灼曰殺王莽秦獻其邑此為致德昨也之〉其後秦遂滅周而取九鼎ㄟㄟ之震木汔金失衆其也〈其由在人言篇也之〉

### 鼎 03 ②

『史記』曰、「周威烈王廿三年、九鼎震。〈<sup>□□</sup>孟康曰、「威烈王之諡也。」師古曰、「即赧王之高祖。」〉金震、木動之也。是時、周室衰微、<sup>□</sup>刑重而虐、言令不從、以亂金氣。鼎者宗廟之寶器也。宗廟將廢、寶鼎將遷、故震動也。是歲、晉三卿韓・魏・趙篡<sup>□</sup>晉君而分其地、威烈王命以為諸侯。天子不恤<sup>□</sup>周姓、而爵其賊臣、天下不附矣。後二世、周致<sup>□</sup>昨德於秦。〈晉灼曰、「<sup>□</sup>赧王奔秦、獻其邑、此為『致德<sup>□</sup>昨。』之也。〉其後、秦遂滅周、而取九鼎。九鼎之震、木<sup>□</sup>汔金、失衆甚也。〉〈其由、在人言篇也。之也。〉

### 鼎 03 ③

『史記』に曰く、「<sup>(一)</sup>周の威烈王の廿三年、九鼎震ふ。」と。〈孟康曰く、「威烈は王の諡なり。」と。師古曰く、「即ち<sup>たん</sup>赧王の高祖なり。」と。〉金震ふは、木之を動かすなり。是の時、周室衰微すれば、刑重くして虐、言令従はず、以て金氣を亂す。鼎は宗廟の寶器なり。宗廟將に廢れんとし、寶鼎將に遷らんとす、故に震動するなり。是の歲、晉の三卿韓・魏・趙晉君を篡して其の地を分かち、威烈王は命じて以て諸侯と爲す。天子周姓を<sup>あはれ</sup>恤まず、而るに其の賊臣を爵せば、天下附かず。後二世、周昨德を秦に致す。〈晉灼曰く、「赧王秦に奔らんとし、其の邑を獻ず、此れ『德昨を致す』と爲す。」と。之なり。〉其の後、秦遂に周を滅ぼし、九鼎を取る。九鼎の震ふは、木金を汔ひ、衆を失ふこと甚しければなり。」と。〈其の由、人言篇に在り。之なり。〉

### 鼎 03 ④

(一)『史記』卷四・周本紀には「威烈王二十三年、九鼎震。」とあるのみ。本條は『漢書』卷二七中之上、五行志にみえる。言羞・木沴金に相當する。『史記』周威烈王二十三年、九鼎震。…中略…九鼎之震、木沴金、失衆甚。」とあり、注も含めてほぼ同文がみえるので、『漢書』から孫引きした可能性が高い。

#### 鼎 04 ①

又曰漢武祠后主得鼎、大異於衆鼎、乃以禮祠迎鼎、至甘泉、從行、上薦之。至中山、有黃雲蓋焉、有鹿過、上自射之、因以祭。至長安、公卿大夫皆議諸尊鼎、有司皆曰、黃帝作寶鼎三、象天地人也。禹收九牧之金、鑄鼎荆山之<sup>下</sup>、名曰九鼎也。今鼎至甘泉、永休無疆、中山有黃白雲降蓋、而帝者心知其意、而合德焉。鼎宜見於祖禰、藏于帝庭、以合明應。制曰、可。

[1] 諸書は「下」に作る。あるいは「百」の草書「𠂔」が「下」字に近いので書き誤ったものか。

#### 鼎 04 ②

又曰、「漢武祠后土、得鼎。鼎大異於衆鼎、乃以禮祠迎鼎、至甘泉、從行、上薦之。至中山、有黃雲蓋焉。有鹿過、上自射之、因以祭。至長安、公卿・大夫、皆議諸尊鼎。有司皆曰、『黃帝作寶鼎三、象天・地・人也。禹收九牧之金、鑄鼎荆山之下、名曰九鼎也。今鼎至甘泉、永休無疆、中山有黃白雲降蓋、而帝者心知其意、而合德焉。鼎宜見於祖禰、藏于帝庭、以合明應。』制曰、『可。』」

#### 鼎 04 ③

又た曰く、「<sup>(一)</sup>漢武后土を祠りて、鼎を得。鼎大いに衆鼎に異なれば、乃ち禮を以て祠り鼎を迎へて、甘泉に至り、行に従ひ、上之を薦む。中山に至り、黃雲の蓋ふこと有り。鹿の過ぐる有り、上自ら之を射、因りて以て祭る。長安に至り、公卿・大夫、皆な諸もの尊鼎を議る。有司皆な曰く、『黃帝寶鼎を作ること三、天・地・人に象るなり。禹九牧の金を收め、鼎を荆山の下に鑄、名づけて九鼎と曰ふなり。今、鼎甘泉に至れば、永休疆り無し、中山に黃白の雲降りて蓋ふこと有り、而して帝は心に其の意を知り、而して德を焉に合す。鼎宜しく祖禰に見はし、帝庭に藏し、以て明應に合すべし。』と。制して曰く、『可なり。』と。

#### 鼎 04 ④

(一)『史記』卷一二・孝武本紀、卷二八封禪書、および『漢書』卷二五上・郊祀志上に本條の内容を含む記事がみえる。『史記』孝武本紀には次のようにある。

其夏六月中、汾陰巫錦爲民祠魏脰后土營旁、見地如鉤狀、掇視得鼎。鼎大異於衆鼎、文鏤母款識、怪之、言吏。吏告河東太守勝、勝以聞。天子使使驗問巫錦得鼎無姦詐、乃以禮祠、迎鼎至甘泉、從行、上薦之。至中山、晏溫、有黃雲蓋焉。有麋過、上自射之、因以祭云。至長安、公卿大夫皆議請尊寶鼎。天子曰「聞者河溢、歲數不登、故巡祭后土、祈爲百姓育穀。今年豐廩未有報、鼎曷爲出哉。」有司皆曰「聞昔大帝興神鼎一、一者一統、天地萬物所繫終也。黃帝作寶鼎三、象天地人也。禹收九牧之金、鑄九鼎、皆嘗鬻烹上

帝鬼神。遭聖則興、遷于夏商。周德衰、宋之社亡、鼎乃淪伏而不見。頌云『自堂徂基、自羊徂牛、鼐鼎及鼐、不虞不驚、胡考之休』。今鼎至甘泉、光潤龍變、承休無疆。合茲中山、有黃白雲降蓋、若獸爲符、路弓乘矢、集獲壇下、報祠大饗。惟受命而帝者心知其意而合德焉。鼎宜見於祖禰、藏於帝廷、以合明應。」制曰「可。」

このうち下線部を見ると、冒頭部分にやや書き換えがあるものの、それ以降は字句を含めて本條とおおむね一致することから、本條は『史記』または『漢書』の記事を節略した可能性がある。ただし、禹が「鼎を荊山の下に鑄」たことは現行本の『史記』にはなく、たとえば『説文解字』第七篇上・鼎部「鼎」字に「昔禹收九牧之金、鑄鼎荊山之下、入山林川澤、离魑蜮、莫能逢之、以協承天休。」とみえる。

#### 鼎 05 ①

孫氏瑞應圖曰神鼎者質文精也知吉知凶能輕能重能息能行不煩自沸不及自滿中烟燼之氣自然所生也亂則藏於深山王者興則出衰則吉也

#### 鼎 05 ②

孫氏瑞應圖曰、神鼎者質文精也。知吉知凶、能輕能重、能息能行、不炊自沸、不汲自滿中。烟燼之氣、自然所生也。亂則藏於深山。王者興則出、衰則去也。

#### 鼎 05 ③

孫氏『瑞應圖』に曰く、<sup>(一)</sup>「神鼎は質文の精なり。吉を知り凶を知り、能く軽く能く重く、能く息み能く行き、炊かずして自ら沸き、汲まずして自ら中に満つ。烟燼の氣、自然に生ずる所なり。亂るれば則ち深山に藏る。王者興れば則ち出で、衰ふれば則ち去るなり。」と。

#### 鼎 05 ④

(一)本條は『開元占經』卷一一四、神鼎條および『藝文類聚』卷九九、鼎條に、『瑞應圖』からの引用としてみえており、また『宋書』卷二九、符瑞志にもほぼ同内容が出典を記さずにみえている。ただし、いずれも「烟燼之氣、自然所生也。亂則藏於深山。」に相當する表現はみえない。一方、『太平御覽』卷七五六・鼎條に『晉中興書』曰……又曰、神鼎見。神鼎者仁器也。能輕能重、能息能行、不炊而沸、不汲自盈。烟燼之氣、自然所生也。亂則藏於深山、文明應運而至。故禹鑄鼎以擬之。」とあり、本條に近い表現がみえる。

#### 鼎 06 ①

墨子曰桀爲無道九鼎淪也

#### 鼎 06 ②

墨子曰、桀爲無道、九鼎淪也。

#### 鼎 06 ③

墨子曰く、<sup>(一)</sup>「桀無道を爲せば、九鼎淪むなり。」と。

鼎 06 ④

(一)『墨子』現行本に該当文なし。或は明鬼篇上・中(共に欠)の佚文か。『開元占經』卷一一四・鼎震條に「墨子曰、桀無道、九鼎淪。」とある。

鼎 07 ①

南越志曰永成縣江前有神鼎員數黑高五六丈葛稚川云赤松子陶金丹鼎

鼎 07 ②

『南越志』曰、「永成縣江前有神鼎、員數<sup>□</sup>里、耳<sup>□</sup>高五六丈。葛稚川云、『赤松子、陶金丹鼎。』」

鼎 07 ③

『南越志』に曰く、「永成縣<sup>(一)</sup>の江前に神鼎有り、員數里にして、耳の高さ五六丈なり。葛稚川云へらく、『赤松子、金丹の鼎を陶す。』」と。

鼎 07 ④

(一)『藝文類聚』卷七三、鼎に「『南越書』曰……又曰、永城縣江前有神鼎、圓數里、耳高五六丈。葛稚川云、赤松子陶金丹鼎。」としてほぼ同文がみえる。

(佐々木聡)

一一、 釜

【概要】

釜に關する祥瑞災異の記事を載録するが、前後の器物が概ね祥瑞のみを載せるのに對し、釜については凶兆の占辭や故事が多い。また、また十二支日を配當して個人の家レベルの吉凶を占う占辭や凶兆に對する辟邪方法として呪符を載せる點など、通俗占書によくみられる記事を載せている。こうした記事は、『開元占經』に代表される勅撰占書にはほとんどみられないものであり、『天地瑞祥志』の特徴の一つとも言える。

釜 01 ①

釜〈扶甫反上〉

釜 01 ②

釜〈扶甫反、上〉

釜 01 ③

釜<sup>(一)</sup>〈扶甫の反、上〉

釜 01 ④

(一)「釜」は『玉篇』卷十八・金部に「釜、扶甫切。」とあり、『廣韻』卷三・「父」小韻に「扶雨切」とある。

釜 02 ①

崔顥易林曰釜鳴不可安居

釜 02 ②

焦贛『易林』曰、「釜鳴、不可安居。」

釜 02 ③

焦贛『易林』に曰く、「<sup>(一)</sup>釜鳴れば、安居すべからず。」と。

釜 02 ④

(一)『焦氏易林』剝之訟に「二人輦車、徙去其家。井沸釜鳴、不可安居。」とあり、復之旅・小過之臨もほぼ同文だが、「不可以居」に作る。

釜 03 ①

郭璞同林曰卷令施安上家釜九鳴旬月之中尋有九喪

釜 03 ②

郭璞『洞林』曰、「卷令施安上家、釜九鳴。旬月之中、尋有九喪。」

釜 03 ③

郭璞『洞林』に曰く、「<sup>(一)</sup>卷令の施安上の家、釜九たび鳴る。旬月の中、尋いで九喪有り。」と。

釜 03 ④

(一)『開元占經』卷一一四、竈釜鳴條に郭璞『洞林』からとして同文を引用。

釜 04 ①

京房曰天雨釜甑歲大穰子曰<sup>[1]</sup>鳴釜家中男女乱一云憂外喪也丑日鳴釜家昌弟會一云得財物吉寅日鳴釜天謀有喜一云臥喪卯日鳴釜家有子孫聞不孝一云病長出事辰日鳴釜家長有出行事一云有財物来之巳日鳴釜家有喜事一云有兵賊午日鳴釜家大凶及財一云争田宅奴婢卒死未日鳴釜家有喜一云家長有口舌申日鳴釜家中喪事一云争田宅大富家中有酉日鳴釜家有酒事一云家有卒死人戌日鳴釜有盜賊至一云財物来復去亥日鳴釜有喜一云鬪訟有獄事也

[1] 傍書「日」。

釜 04 ②

京房曰、「天雨釜甑、歲大穰。」<sup>○</sup>「子曰鳴釜、家中男女亂。一云、『憂外喪也。』丑日鳴釜、家昌弟會。一云、『得財物、吉。』寅日鳴釜、天謀有喜。一云、『臥喪。』卯日鳴釜、家有子孫聞不孝。一云、『病長出事。』辰日鳴釜、家長有出行事。一云、『有財物來之。』巳日鳴釜、家有喜事。一云、『有兵賊。』午日鳴釜、家大凶及財。一云、『争田宅、奴婢卒死。』未日鳴釜、家有喜。一云、『家長有口舌。』申日鳴釜、家中喪事。一云、『争田宅、大富家中有。』酉日鳴釜、家有酒事。一云、『家有卒死人。』戌日鳴釜、有盜賊至。一云、『財物來復去。』亥日鳴釜、有喜。一云、『鬪訟有獄事也。』」

#### 釜 04 ③

京房曰く、「天釜甌<sup>ふ</sup>を雨らせば、歳大いに穰<sup>ゆた</sup>かなり。」<sup>(一)</sup>「子日に鳴釜あれば、家中の男女亂る。一に云へらく、『外喪を憂ふなり。』と。丑日に鳴釜あれば、家昌ゆるも弔會あり。一に云へらく、『財物を得、吉。』と。寅日に鳴釜あれば、天謀に喜び有り。一に云へらく、『臥喪あり。』と。卯日に鳴釜あれば、家に子孫有るも不孝と聞こゆ。一に云へらく、『長出の事を病む。』と。辰日に鳴釜あれば、家長に出行の事有り。一に云へらく、『財物之に來たる有り。』と。巳日に鳴釜あれば、家に憲事有り。一に云へらく、『兵賊有り。』と。午日に鳴釜あれば、家大凶にして財に及ぶ。一に云へらく、『田宅を爭ひ、奴婢卒に死す。』と。未日に鳴釜あれば、家に喜び有り。一に云へらく、『家長に口舌有り。』と。申日に鳴釜あれば、家中に喪事あり。一に云へらく、『田宅を爭ふこと、大富家中に有り。』と。酉日に鳴釜あれば、家に酒事有り。一に云へらく、『家に卒かに死する人有り。』と。戌日に鳴釜あれば、盜賊の至る有り。一に云へらく、『財物來たるも復た去る。』と。亥日に鳴釜あれば、喜び有り。一に云へらく、『鬭訟して獄事有るなり。』と。」

#### 釜 04 ④

- (一)『太平御覽』卷七五七、甌條に「京房『易逆刺』曰、天雨釜甌、歳一熟。」とある。また『開元占經』卷三、雨釜甌條に「『易飛候』曰、……又曰、天雨釜甌、其國大饑。」とあるが、むしろその直後に引く『墨子』の佚文「『墨子』曰、天雨釜甌、歳大穰。」がほぼ同文である。なお『易飛候』は「京房『易飛候』」として諸書に引かれる（たとえば『藝文類聚』卷一天部・月および雲、同卷五、歳時部・熟、同卷二〇、人部・賢にみえる）。
- (二)以下は出典未詳。以下は、祥瑞災異を占う京房の怪異占とは、やや異なる性格の占いであり、『開元占經』に代表される勅撰系占書よりむしろ敦煌文獻中の通俗占書や後世の日用類書の占辭に近い。實際、釜鳴に十二支日を配當する占いは、敦煌文獻の『白澤精怪圖』や『百怪圖』などの通俗占書をはじめ、近世の日用類書や日本の占書にも散見されるなど非常にヴァリエーションが多い。ただし管見の限り事例を集めてみたものの、ほとんど占辭が一致するものがなかった。これは釜鳴占そのものが、日本や中國の社會に廣く受容されていたことを考えれば、それだけ多くのヴァージョンの占書が作られたという實態を示すものと考えられる。そこで次頁に、代表的な十二支日釜鳴占を表にまとめておく。

資料の略號は『天地瑞祥志』以外、左から P.2682『白澤精怪圖』（フランス國家圖書館所藏）、羽 44 擬『百怪圖』（杏雨書屋所藏、『敦煌祕笈』所收）、『物象通占』（臺灣國家圖書館藏）器服第十・甌竈釜白變恠占、『五車拔錦』卷三二・法病門（下段）（日用類書集成一・二、汲古書院、1999 年）、『拾芥抄』（國會圖書館藏慶長刊本）釜鳴恠部第十五、『日法雜書』（大將軍八神社所藏寫本）百恠吉凶第六七を指す。

	瑞祥志 1	瑞祥志 2	P.2682	羽 44①	羽 44②	五車拔錦	物象通占	拾芥抄	日法雜書
子	子日鳴釜、家中男女亂。	一云、憂外喪也。	子日釜鳴、妻內亂。	子日鳴、不出百日家、有喪亡、或可二年內。	子日釜鳴、女婦・口舌・耗財・失火、不出旬內有。 <sup>*1</sup>	子日見恠……甌鳴、主欠家神願。	子日、六畜死。	子日、愁事。	子日、宅凶。
丑	丑日鳴釜、昌弔會。	一云、得財物、吉。	丑日釜鳴、有上客君子會。	丑日鳴、失財、不出百日。	丑日、會客、亡六畜、口舌。用桃木七寸六枚?、尅作人、書天文符戶上、吉。子准同。	丑日見恠……甌鳴怪、主退大財。	丑日、富貴。	丑日、喪事。	丑、口舌凶。
寅	寅日鳴釜、天謀有喜。	一云、臥喪。	寅日釜鳴、有嫁娶、吉、慶會。	寅日鳴、捐賊。或吉事來。	寅日、憂女子亡、時家破、口舌、女長子人凶。用桃木長九尺十枚、書天文符、懸宅上、吉。	寅日見恠……甌鳴、主賊盜侵害。	寅日、大凶。	寅日、官事、凶。	寅、口舌病。
卯	卯日鳴釜、家有子孫聞不孝。	一云、病長出事。	卯日釜鳴、長子徭役、其門不好。	卯日鳴、女婦事、不出廿日、田宅・口舌、盜賊起。	卯日、祭祀不了、家長少子、口舌。不出其年月、破家、惡。用木長六寸七枚、書天文符、新光中盆下祭之三月四月、吉也。	卯日見恠……金甌鳴、欠天神願。	卯日、大凶。	卯日、家喪事。	卯、益人口。
辰	辰日鳴釜、家長有出行事。	一云、有財物來之。	辰日釜鳴、家有行、非父則母。	辰日鳴、失火、不出三年。家內有外人來賊。	辰日、口舌、子孫不利。	辰日見恠……甌鳴、主得橫財、吉。	辰日、大吉。	辰日、家亡。	辰、有道路。
巳	巳日鳴釜、家有意事。	一云、有兵賊。	巳日釜鳴、憂聚衆・獄訟事。	巳日鳴、宅不利之、靈?口、散財。	巳日、鬪打、口舌、凶。	巳日見恠……金甌鳴、主有官事。	巳日、婚吉。	巳日、中吉來。	巳、宅不利。
午	午日鳴釜、家大凶及財。	一云、爭田宅、奴婢卒死。	午日釜鳴、家有憂奴婢事。	午日鳴、不出三年、備之、吉也。	なし	午日見恠……金甌鳴、主宅興、吉。	午日、官事散。	午日、鬼神來。	午、益財。
未	未日鳴釜、家有喜。	一云、家長有口舌。	未日釜鳴、家有德吉。	未日鳴、口舌・集衆。	未日、家吉。或凶、北家病。	未日見恠……金甌鳴、主進人口。	未日、大凶。	未日、口舌事。	未、有酒食。
申	申日鳴釜、家中喪事。	一云、爭田宅、大富家中、有。	申日釜 <sup>ママ</sup> 鳴、家聚衆、凶、有喪。 <sup>*2</sup>	申日鳴、中女離別。	申日、死亡、官事、不出日。	申日見恠……甌鳴、欠下天神願。	申日、行人至 <sup>*3</sup>	申日、同上(口舌事)。	申、小口舌病。
酉	酉日鳴釜、家有酒事。	一云、家有卒死人。	酉日釜鳴、家有祀祠事。	酉日鳴、亡惡相。家亦病。	酉日、非禍。論財、婦女、口舌。	酉日見恠……甌鳴、主有喜事、吉。	酉日、行人至。 <sup>*3</sup>	酉日、同上(口舌事)。	酉、有酒肉。
戌	戌日鳴釜、有盜賊至。	一云、財物來復去。	戌日釜鳴、凶、耗錢財、凶。	戌日鳴、六畜死亡。	戌日、口舌、官事、六畜死亡。	戌日見恠……甌鳴怪、小人公事。	戌日、富。	戌日、大凶。	戌日、宜六畜。
亥	亥日鳴釜、有喜。	一云、鬪訟有獄事也。	亥日釜鳴、官祿成、家安樂、無殃咎、吉。	亥日鳴、官事・口舌不利。	亥日、官事、亡遺、六畜。	亥日見恠……甌鳴、主婚姻事、吉。	亥日、吉昌。	亥日、小吉。	亥、主財。

\*1 當該條は、節題の前の行に書かれており、あるいは次の丑日條以下とは別系統の占辭の可能性もあるが、ここに挙げておく。

\*2 原本は酉→申の順に配列。




\*3 一部缺。臺灣故宮博物院所藏『大統通占』(明・劉哲奉勅撰)卷五七所引『物象通占』に據り補う。



なお、釜鳴については、拙論「釜鳴をめぐる怪異観の展開とその社会受容」（『人文學論集』第35集、2017年）、P.2682『白澤精怪圖』と『天地瑞祥志』の釜鳴占比較については、游自勇「《白澤精怪圖》所見的物怪」（黄正建主編『中國社會科學院「敦煌學回顧與前瞻」學術研討會論文集』上海古籍出版社、2012年）、敦煌本『百怪圖』と釜鳴については、岩本篤志「敦煌占怪書「百怪圖」考」（『敦煌寫本研究年報』第5號、2011年）、游自勇「敦煌寫本《百怪圖》補考」（『復旦學報（社會科學版）』2013年第6期）、王祥偉「日本杏雨書屋藏敦煌文書羽044之《釜鳴占》研究」（『文獻』2014年第4期）に詳しい検討がある。上掲の表を作成する際には、適宜、先行研究を下敷きにし、その上で近世の文獻を新たに追加した。

#### 釜 05 ①




獸鳴釜法



 〈符獸釜鳴書桃著處板吉也〉
 

此符釜鳴釜上中書著即無殃也

#### 釜 05 ②




厭鳴釜法



 〈符厭釜鳴。書桃、著處板、吉也。〉
 

此符、釜鳴、釜上中書著。即無殃也。

#### 釜 05 ③

鳴釜を厭するの法



 〈符釜鳴を厭す。桃に書き、處板に著ければ、吉なり〉
 

此の符、釜鳴あれば、釜の上中に書して著けよ。即ち殃ひ無からしむるなり。

#### 釜 05 ④

(一)出典未詳。なお釜鳴や釜怪を鎮める呪符は、『開元占經』に代表される勅撰占書にはみえず、先に挙げた『百怪圖』の十二支日釜鳴占や日用類書の法病門、さらには道教經典『靈寶無量度人上經大法』などにみえるが（次頁圖参照）、管見の限り一致するものを見いだせなかった。



図1 『靈寶無量度人上經大法』卷五「治釜鳴符」 図2 『五車拔錦』卷三二法病門「禳竈釜甗恠符」

(佐々木聡)

## 一二、甗

### 【概要】

甗に関する祥瑞を緯書や『瑞應圖』から集めるが、いずれも神器の出現を述べたもので、甗をめぐる雑多な怪異は載録されていない。甗は前項に挙げた釜と一緒に用いられるものであり、たとえば釜鳴の怪異はしばしば「甗鳴」とも書かれる（前掲拙論「釜鳴をめぐる怪異観の展開とその社会受容」3頁参照）。『天地瑞祥志』の編纂当時においても、釜と同様、甗についても様々な記事があったと思われるが、ここでは取られていない。

#### 甗 01 ①

甗〈子孕反去〉

#### 甗 01 ②

甗〈子孕反、去〉

#### 甗 01 ③

甗<sup>(-)</sup>〈子孕の反、去〉

#### 甗 01 ④

(一)甗は『玉篇』卷一六・瓦部に「甗、子孕切。」とあり、『廣韻』卷四「甗」小韻に「甗、……子孕切。」とある。

#### 甗 02 ①

孝經援契神<sup>[1]</sup>曰丹甌不煩<sup>[2]</sup>而自孰五穀豐稔則見。

[1] 尊經本に「神」を「契」の前に挿入すると見なしうる書き入れあり。

[2] 諸書は「炊」に作る。あるいは「煩」の草書「煩」が「炊」字に近いため、書き誤ったものか。

#### 甌 02 ②

『孝經援神契』曰、「丹甌不炊<sup>□</sup>而自孰<sup>○</sup>。五穀豐稔則見。」

#### 甌 02 ③

『孝經援神契』に曰く、「丹甌炊<sup>(一)</sup>かずして自ら孰<sup>に</sup>ゆ。五穀豊かに稔れば則ち見はる。」と。

#### 甌 02 ④

(一)『開元占經』卷一一四、丹甌條に『援神契』からの引用としてほぼ同文がみえる。『開元占經』は「孰」を「熱」に作る。

#### 甌 03 ①

瑞應圖曰丹甌者淫紛之物棄則出大出甌中不出年家必有自鬪斬頭死者若遭火災也

#### 甌 03 ②

『瑞應圖』曰、「丹甌者、淫汚<sup>□□</sup>之物棄則出。」。「火<sup>●</sup>出甌中、不出年、家必有自鬪<sup>●</sup>斷頭死者、若遭火災也。」。

#### 甌 03 ③

『瑞應圖』に曰く、「丹甌は、淫汚の物棄つれば則ち出づ。」と。「火甌<sup>(二)</sup>の中に出づれば、年を出でず、家に必ず自ら鬪ひて頭を斷ちて死する者有り、若しくは火災に遭ふなり。」と。

#### 甌 03 ④

(一)本條は『開元占經』卷一一四、丹甌條に『瑞應圖』云、王者棄淫汚之物則丹甌出。」とあり、また『稽瑞』(早稻田大學圖書館所藏清刊本)一三葉裏に「孫氏『瑞應圖』曰、五穀豐則丹甌出。一本云淫巧棄則丹甌出。」とある。

(二)本條は出典未詳。北宋初期までに成立したと思われる占書『禮緯含文嘉』の精魅篇に「炊竈未沸甌中火出者大凶、以羊糞二十七粒、釜西埋之、吉。」(拙著『復元白澤圖—古代中國の妖怪と辟邪文化』白澤社、2017年、147頁)とある。

(佐々木聡)

## 一三、甕

### 【概要】

甕に関する祥瑞を緯書や『瑞應圖』から集めるが、いずれも神器の出現を述べたもので、甕をめぐる雑多な怪異は載録されていない。

甕 01 ①

甕 〈於貢反去〉

甕 01 ②

甕 〈於貢反、去〉

甕 01 ③

甕<sup>(一)</sup> 〈於貢の反、去〉

甕 01 ④

(一)「甕」は『玉篇』卷十六、瓦部に「瓮、於貢切。甕、同上。」とあり、『廣韻』卷四「瓮」小韻に「烏貢切」とある。

甕 02 ①

孝經援神契曰銀甕平甕也不及自滿

甕 02 ②

『孝經援神契』曰、「銀甕、平甕也。不<sup>□</sup>汲自滿。」

甕 02 ③

『孝經援神契』に曰く、「<sup>(一)</sup>銀甕は、平甕なり。汲まずして自ら滿つ。」と。

甕 02 ④

(一)本條は『太平御覽』卷八一二、銀條に「『孝經援神契』曰、神靈滋液、有銀甕、不汲自滿。」とある。なお「銀甕」を「平甕也」とする記事は他書にはみえず。

甕 03 ①

瑞應圖曰玉甕者聖人應也不及自盈王者清廉則出

甕 03 ②

『瑞應圖』曰、「玉甕者、聖人應也。不<sup>□</sup>汲自盈。王者清廉則出。」

甕 03 ③

『瑞應圖』に曰く、「<sup>(一)</sup>玉甕は、聖人の應なり。汲まずして自ら盈つ。王者清廉なれば則ち出づ。」と。

甕 03 ④

(一)本條は『開元占經』卷一一四、玉瓮條に「『瑞應圖』曰、玉瓮者聖人應也。不汲自盈。王者飲食不流離下賤則出。」とあり、『稽瑞』四四葉裏に「孫氏『瑞應圖』曰、玉甕瑞器也。不汲自滿。王者清廉則見也。」とあり、それぞれ下線部が一致する。

甕 04 ①

孫氏瑞應圖曰銀甕者刑法得中民不悲怨則出也

甕 04 ②

孫氏『瑞應圖』曰、「銀甕者、刑法得中、民不悲怨、則出也。」

甕 04 ③

孫氏『瑞應圖』に曰く、<sup>(一)</sup>「銀甕は、刑法中たるを得、民悲しみ怨まざれば、則ち出づるなり。」と。

甕 04 ④

(一)『初學記』卷二七、銀・敘事に「『瑞應圖』曰、王者宴不及醉、刑罰中、人不爲非、則銀甕出。」とあるが、「人非を爲さずんば」の部分が本條と異なる。

(佐々木聡)

以下次號掲載豫定

〔附記〕本稿は、科学研究費助成事業基盤研究（B）（一般）「前近代東アジアにおける術数文化の形成と伝播・展開に関する学際的研究」（課題番号 16H03466 研究代表者水口幹記）の助成を受けた研究成果の一部である。また、山崎担当部分は、科学研究費助成事業若手研究（B）（課題番号 17K13433）の、佐野担当部分は、公益財団法人豊秋奨学会の助成を受けた研究成果の一部でもある。